

花

fireworks

火

夏
の

風

物

誌

博物館收藏資料展



ご あ い さ つ

厚木市の夏を彩ります「鮎まつり」、その中でも数十万人の人を集める花火大会。まつりの賑わい、夕涼みの風情など、ふるさと・厚木でみる花火には郷土意識を育くむ特別な何かがあるように思われます。

今回の第4回博物館収蔵資料展は、錦絵に描かれた花火を中心とし、打ち揚げ花火の仕組、製造工程、楽しみ方、見どころなども取り込み、鮎まつり（花火大会）のガイドにもなる楽しい展示会となっております。鮎まつりにお出かけになる前に、展示会で描かれた花火を楽しみ、花火に関する知識を仕入れることもまた一興かと思えます。

最後に、本展を開催するに当たり、御協力を賜りました関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成7年7月

厚木市教育委員会 教育長

中 島 久 雄

目 次

●ごあいさつ、目次	2
PROLOGUE 厚木と花火	3
I 錦絵に花火をみる	7
・ 錦絵に花火をみる-江戸から明治へ-	8
・ 収蔵資料解説	10
・ 絵師概説	35
II 花火、そのみどころ	37
・ 錦絵の花火はなぜ暗い？他	38
III 花火をつくる-厚木の花火職人-	51
・ 花火職人 和田吉二さん	
・ 花火の製造工程	
●花火収蔵資料、借用資料一覧	60

凡 例

- ・ 本展は博物館収蔵資料を中心に一部、個人収蔵資料を含め、花火に関する資料を展示した。
- ・ 原稿執筆については、I章を小澤弘氏（調布学園短大教授）に、II章を武藤輝彦氏（日本煙火芸術協会顧問）にそれぞれお願いした。PROLOGUE、III章は大野一郎（厚木市教育委員会）が執筆した。
- ・ 資料の写真撮影は加藤芳明氏をお願いした。その他、使用した写真の撮影者については個々に記した。
- ・ 本展企画には大野があたり、平本元一、山口雅也が協力した。
- ・ 表紙資料
6. 初代 歌川広重
「両国納涼大花火」

荻野山中藩の御殿さまが見た花火、祭りなどで皆が楽しんだ花火、そして料亭が打ち揚げた花火。スタイルはそれぞれ異なりますが、皆に愛され、現在の鮎まつりの花火大会へと引き継がれてきました。

「鮎まつり」開催の話がはじまったのは昭和22年3月のことでした。第二次世界大戦下における物資統制の大部分が、やっと解除された頃です。また、この時期になると商品も潤沢とはいえませんが徐々に回り始め、厚木だけでなく各地の商店も店を開いて活発な営業活動を開始しました。

こうした時代を背景にして、鮎まつりは企画されたのです（注1）。



▲ 94年の鮎まつりで（広報課提供）

第1回鮎まつり開催

鮎まつりの計画は、愛甲地方事務所が中心となって、愛甲郡内の商工業者、厚木町商工業者との間で具体的に進められました。そこでは、鮎まつりだけではなく、厚木観光協会の結成、そしてこの会の主催する「名物相模川の鮎」などの計画も同時に進められました。そして、昭和23年8月14日と15日の両日に第1回鮎まつりが開催されたわけです。

以後、鮎まつりは年々盛況となり、昭和25年には、厚木神社裏の河原に仕掛け花火が5点、早打ちが2点、その他多数の打上げ花火が昼間から広告入りで打上げられるようになりました。

今日、花火といえば夜間に見物するものと考えるのが常識でしょう。しかし、以前には、吊物、袋物花火といって、上空で玉皮が2つに割れ、人形や風船などをフワフワと落下させ、昼間に打ち揚げられるものがありました。また、「日月」「群光」など主に色のついた煙を楽しむものもありました。いずれも年輩の方であればあたりまえのことと思われるが、交通事情などにより打ち上げられなくなっ

て久しい昼花火は、すでに注釈を必要とするものとなってしまったようです（注2）。

その後、昭和38年には仕掛け花火が24点となり、打上げ、仕掛けの設置場所も北側の総合グラウンドに移り、いよいよ大がかりなものとなっていきました。

昨年、平成6年には6,500発を打ち上げ、周辺地域でも大きな花火大会になりました。

殿様の花火見物

厚木における花火の記録は、当然ながら「鮎まつり」よりもさらに前のことです。そして、日本最初の花火の打ち揚げはもっと古いことになります。

次に、鮎まつり以前の厚木と花火のかかりについてみていくことにしますが、その前に日本の花火の歴史について少し述べておきましょう。といっても、日本最初の花火については、実のところ正確には分っていません。ただ、鉄砲が伝来した天文12年（1543）以降のこととされています。花火に関する最も古い文献は、『北条五代記』という小田原の北条氏を描いた江戸時代の書籍といわれています。

そこでは、天正13年（1585）、100日にも及ぶ皆川山城守と佐竹衆の戦いの際、互いに花火を揚げて慰みに供したという記述があります。ただし、このときの花火がどのようなものであったのか、詳しくは分っておらず、疑わしいともされています。

さて、厚木において記録上初めて花火が登場するのが、幕末の弘化3年（1846）で、荻野山中藩の御用廻状においてのこととされています。

「弘化三午年
七月十五日八ツ時より返りセツ半二返り
一 殿様 向山（難波）東兵衛持山江裏
御門より花火打上見物御出被成候

御案内 下オキノ 武兵衛
中オキノ 庄兵衛

一 御返之節ハ牛ケ淵二而御家中衆兩人
水あび被成候 夫より清水御門二相成候
一 安西六郎、小岩市太郎殿 花火九本
打上被成候

七月十五（六カ）日五ツ時より裏御門より
右同断之御見物

花火拾壹本上り候 四ツ時御返り裏御
門より

御案内 同人」

（下荻野・難波東平家文書、原文縦書）

ここには、荻野山中藩、最後の藩主である大久保教義の花火見物の様子が記されています（注3）。

記録によると、この花火が打ち揚げられたのは、7月15日と16日の両日で、孟蘭盆の頃のことです。よく知られているように、両国の花火は享保18年（1733）に江戸幕府が凶作、疫病で亡くなった人の霊を慰める水神祭に、附近の水茶屋が花火を献上したのがはじまりとされています（注4）。

荻野で打ち揚げられたこの花火が、どのような性格、目的のものであったのかは分かりません。しかし、打ち揚げられた

時期などを考えるならば、単なる夏の見物ではなく、先祖の霊を慰めるために、わざわざ盆の時期を選んで打ち揚げられたものと思われます。

毎年10月はじめに盛大に行われる茨城県土浦市の花火大会も、大正年間に海軍航空隊の巡難者の霊を慰撫するため、地元の寺が主催したものがはじまりといわれています（注5）。「花火は盆の火祭の一つの変形」と民俗学者の柳田国男が述べているように（注6）、花火というものは現在のように祝いごとに使われるだけではなく、死者供養とも深い結びつきがありました。

厚木でも「鮎まつりのとき以外に相模川に燈籠流しをしながら、盆の供養に花火を打ち揚げたこともありました」と、厚木の花火師・和田吉二さんは語っています。

ともあれ、荻野山中藩の砲術文武世話役である安西六郎、小岩市太郎の両名によってその花火は打ち揚げられました。そのうち、15日は昼花火なので、前述したように現在のような“火の花”をみるものではなく、主に煙を楽しむものであったかと思われます。

明治天皇歓迎の花火

明治14年4月末に愛甲郡荻野村子ノ神（現 厚木市荻野）で行われた近衛兵対抗運動（演習）に際して明治天皇の行幸がありました。

明治14年5月1日付けの「東京横浜毎日新聞」によれば、「厚木妻田の人民は対抗運動天覧の節烟火を打揚げ且つ大風を飛揚して天覧に供し奉らんと予て其用意を為す」（注7）とあり、妻田村の人々が花火を打ち揚げ歓迎したことが記されています。当時は、素人が農業の合間などに花火を作り、村の祭りで打ち揚げて楽しむことが多くみられたといえます。

この時も、明治天皇の行幸を花火で祝ったのでしよう。

また、厚木町の下町、中町、天王町、上町の4ヶ町より歓迎の大風を一枚ずつ揚げたとの記録もみられます。中でも、上町、下町では1,100枚貼（六間四方）の大風を揚げたといいます。

厚木を飛び出した花火師

現在、厚木市域では和田吉二さんという花火師が活躍していますが、和田さんの住む厚木市棚沢には、他にも柏木新造さんという花火師が明治時代に活動していました。

新造さんは、明治期、和田さんの先々代・忠次郎さんらに最新の花火技術を伝えたり、ブラジル、台湾などで花火を打ち揚げたという花火師です（注8）。

棚沢の常昌院に残された墓誌には、その事績について息子の兼三さんが次のように記しています。

「父ハ新造ト云イ母ハリセト云ウ 壮時養蚕研究ニ没頭小鮎南毛利方面ニ指導巡廻スルコト数年又東京都浅草玉屋煙火製造所ニ入り其ノ技術ノ蘊奥ヲ究ム 明治三十九年選レテ南米ブラジル等ニ赴キ因ニ萬国博覧会煙火打上競技大会ニ参加シ其ノ技能ヲ發揮シテ無上ノ名譽ヲ獲得セリト云ウ 明治四十四年春路恙ガナク横浜ニ販着其ノ後幾多ノ業績ヲ残シ老後ヲ悠々自適セリ矣」。

祝いものとしての花火

その後も、厚木にとって節目となるような重要な事柄についての式典では、必ずといってよいほど花火が打ち揚げられ



▲台湾(阿里山周辺?)で花火打ち揚げ(右端が新造さん)

ています。この種の打ち揚げが多くなるにつれ、花火は死者供養との結びつきよりも、祝いごととの関係が深まっています。では、年代順にみてみましょう（注9）。

●明治41年10月26日に行われた相模橋開通式では、江戸時代に度々禁止された手踊などとともに、余興の一つとして花火が打ち揚げられました。

「相模橋開通式挙行ニ付一切ノ余興掛ヲ当町ニ依頼セラレタルニ依リ、此ノ人員其任ニ当ル…（中略）…但し余興に煙火・角力・大神楽・手踊」

（本町（上町）記録より）

●大正元年11月に、厚木の町に初めて電気を送った厚木電気株式会社が開業式を行ないました。その際、相模川で花火の打ち揚げが行われましたが、その時の届書が残されています。当時の保安距離、つまり人家、公道と打ち揚げ場所の距離は、百廿間（約216m）となっています。

「打揚烟火願

一 烟火ノ種類及員数

打揚烟火ニテ 五十本

一 打揚日時及場所

大正元年拾壹月拾六日午前六時ヨリ午後 十時迄デ 別紙地面ノ場処ニ於テ執行

一 打揚ト人家及公道トノ距離

別紙地面ノ通り 人家トノ最近距百廿間
公道トノ全 百廿間

右ハ拾壹月拾六日当社開業式ノ為メ烟火
打揚仕り度候間御許可相成度此相願候也

厚木電力株式会社 岩崎吉太郎
大正元年拾壹月拾五日

厚木警察署長

察(警力)部 持田伊助殿」

●昭和2年4月1日付けの『横浜貿易新報』では、小田急線の開通式について「(厚木)町商工会では、連合大売出しを催し、数百本の煙火を終日打ち揚げる等未曾有の盛況を呈するであろう」と述べられています。

昭和10年の花火大会

厚木町の旅館、料亭などは、相模川で「鮎漁遊船会」を明治末期頃から盛んに実施するようになり、6月1日または7月1日に川開きの花火大会を行うようになっていました。

この花火大会がいつ頃から行われていたのか正確には分かりません。しかし、昭和10年に厚木町商工会と厚木町青年団の共催による花火大会が行われたことが、残された「花火大会」(注10)のポスターによって分っています。

このポスターには、「相模川畔 厚木の大火火 大玉変色大連発 大仕掛「厚木の花園」外数十台と仕掛花火」と書かれています。

この時の「厚木の花園」と称する仕掛花火がどんなものであったのか分かりません。また、この花火大会がいつ終わったのかさえもはっきりとはしていません。おそらく第二次世界大戦の激化とともに中止されたであろうことは想像に難くあ

りません。

＊

先祖の霊を慰めるために御殿さまが打ち揚げていた花火は、やがて鎮守の祭りで皆が楽しむものとなります。そして、それは料亭などで粋客が楽しむものへと遷り変り、戦後になると皆が楽しめるような「鮎まつり」の花火大会へとそのスタイルを変えながらも引き継がれていったのです。

注

1. 厚木市史編纂委員会編『厚木産業史話』1976年、鈴木茂『厚木の職人』1980年は、全体にわたって参考にさせていただいた。
2. 武藤輝彦『どーんと花火』1994年、三空出版
3. 厚木市下荻野・難波東平家文書(鈴木茂『厚木の職人』1980年)
4. 細谷政夫『花火の科学』1980年、東海大学出版会
5. 土浦市立博物館・榎陽介学芸員のご教示による。
6. 柳田国男「郷土生活の研究法」『定本柳田国男集 25巻』324頁
7. 『東京横浜毎日新聞』(明治14年5月1日、復刻版)、柏書房
8. 柏木新造さんについては、孫の愛次郎さんからの聞き書きによる。
9. 鈴木茂『厚木郷土史 第二巻・現代編』1983年再版、前出『厚木の職人』
10. 飯田孝氏蔵

I 錦絵に花火をみる

錦絵に描かれた花火は、“和火”といわれるもので現在の“洋火”とは材料、製造方法などが異なります。硝石、硫黄などしか使えなかった江戸時代から、明治になると塩素酸カリウムなどの薬品が外国から流入したことによって美しい炎色を出すことが可能になりました。一方、錦絵の世界でもケミカルな絵の具の使用によってより鮮やかな色彩が描けるようになりました。

科学的な薬品のもたらした花火の“鮮やかさ”は万人の歓迎するところとなりましたが、ヴァール(色価)がくってしまった錦絵の方ではそうはならなかったようです。

ここでは、江戸から明治へと移り変わる「時代の変化」を川開きの賑わい、夕涼みの風情など、描かれた人物、背景の細部から絵画資料を“読み込む”作業を調布学園短大教授の小澤弘先生に行なっていただきました。

錦絵に花火をみる —江戸から明治へ—

夏の夜空をキャンパス地に見立てて、華麗な彩りの光が競演する「花火」。それは、現の世におけるはかない夢の一時でもある。さて、ここでは「花火を描いた錦絵」を見ながら江戸の花火と、それにまつわる風俗をながめてみよう。

浮世のひとつき

錦絵は、世界に誇る日本の「浮世絵」の一つのジャンル、すなわち多色摺り木版画である。それは、印刷という方法を用いた近世の出版文化の隆盛による、文化の大衆化の結実であるといつてよい。

上方の出版文化が東漸し、地方からみて「江戸絵」と呼ばれた絵画が意識されるようになったのは17世紀の後半で、その祖とされるのが菱川師宣である。

浮世を描いた絵画、それを浮世絵と称したが、その背景には現世の辛さをそのまま憂うべき世とみるのではなく、むしろ積極的に現世に享楽を求める、つまり現世肯定の思想が近世初頭に興って、特に都市の人々に支持されたのである。

花火を描いた錦絵

花火が描かれている錦絵は、およそ二つのタイプに分けられる。一つは、画題として、花火とそれをみる人びとを点景として描くもので、たとえば歌川広重の描いた118枚のシリーズ画「名所江戸百景」の一枚「両国花火」（19頁、大判錦絵、通例の錦絵のサイズで、B4判程度の大きさ）や、二代喜多川歌麿の描いた大々判（大判の倍のサイズ）の「浮絵 江戸大川夕納涼之図」（26、27頁）などが、これにあたる。

いわば大和絵の伝統的な画題である名所絵や、月次絵（四季絵）の系譜を引く作品であり、それが江戸の大川の、両国橋を中心に上下で繰り広げられた夏の納涼の花火会を画題としたものである。

鳥瞰図法や、西洋から入ってきたパースペクティブの技法（一点透視図法）による「浮絵」の作品が多い。

もう一つは、花火の方が背景となり、季節感（夏の風物）や場所（両国だとか、隅田川だとかいう）を表現する手段とし

て組み込まれている作品で、これは主として人物（美人や角力、役者などが画題の中心である）をテーマとした作品である。

たとえば、歌川国貞改め二代歌川豊国（三代豊国のこと）の描いた、横大判錦絵の縦横六枚続きの珍しい形式の作品である「秀の山雷五郎、荒馬吉五郎、小柳常吉」（30、31頁）の浴衣姿の三人の角力が花火を背景に橋上（両国橋を意図している）での納涼を描いた作品などが、それである。苦みばしった荒馬の手の螢の籠が、ここでは夏の夜の風情をあらわし、その背後に炸裂する花火とのコントラストが趣となっている。

この三人の人物を描く様式は、いわば仏画の三尊形式の見立てでもあるが、遊女や町美人などの美人画や人気の役者絵に多用されており、ここでは角力が画題となったもの。豊原国周と井上探景の描いた三枚続きの「両国大花火夕涼之景」（31頁）がその美人画版であり、婀娜な浴衣姿の三美人を人物画の名手国周が、背景を風景画で知られた探景がそれぞれ分担したもの。

この二つのタイプの折衷ともいえるのであるが、両者をほぼ同等なバランスで描いている作品もある。大型の屋形船（川一丸や吉野丸、明治になると東京丸など）を配する作品である。

初代豊国の描いた五枚続きの作品「無題（両国橋花火之図）」（10、11頁）では、吉野丸の船上で役者が木琴を演奏しているのがみえる。

初代歌川豊国の描いた5枚続きの佳品「無題（両国橋花火之図）」では、吉野丸の船上で役者が木琴を演奏しているのがみえる。

この木琴の演奏は、歌舞伎の「天竺徳兵衛韓話」に出てくるといえるが、本図は珍しい木琴演奏の資料としても興味深い作品である。実は、この木琴を演奏して

いる人物は、その面貌と紋から歌舞伎役者の尾上栄三郎と分かり、同様に見てみると、右脇で扇を使っているのが沢村源之助、「吉野」の額の下にいる女姿は女方の岩井半四郎、真ん中の第3図の橋下の屋形船の舳先に首に手拭いを巻いた鼻高の男が松本幸四郎である。つまりこの絵は、文化元年に初演された「天竺徳兵衛韓話」の改題版で文化6年(1809)6月11日より森田座で公演された「阿国御前化粧鏡」の天竺徳兵衛役の尾上栄三郎が座頭にて木琴打つ所作を、両国花火と納涼の図に組み込んで描いた作品なのである。栄三郎の父松助の工夫した水中早替わりの芸は、夏の狂言としてもてはやされ、評判となったのである。

さて、この五枚続きの大画面では、弓なりした両国橋を描いており、そこには沢山の四民老若男女の花火見物の姿が描かれ、左上には浅草寺、大川橋(吾妻橋)、蔵前、首尾の松が見える。両国橋の西橋詰の広場には大阪下りの女軽業の小屋がたち、その庭は酒樽の孤に“刺菱”や“男山”の商標が印されている。船の作り物を看板として上に載せた振り売り、すなわち虫籠を積んだ虫売りの姿も見え、花火に納涼をかこつ人びとの様子が楽しい。

両国と花火

さて、江戸の花火は万治2年(1659)にはじまるという。大和国(現在の奈良県)出身の弥兵衛という者(花火師鍵屋の先祖)が、火薬から花火を考案し、売り出したという。打ち揚げ花火は、享保18年(1733)の5月28日に、前年の疫病コロリで多くの死人がでた供養と疫病退散を祈願して、この鍵屋が隅田川の両国で大花火を行ったことを嚆矢とする。鍵屋とならんで呼ばれる玉屋は、鍵屋の手代が文化7年(1810)にはじめたという。以後、「玉屋、鍵屋」の掛け声で有名な両国の花火は、両国橋の上流を玉屋、下流を鍵屋が打ち揚げを受持ち、江戸の夏の風物となって今日に及んでいるのである。

最初は、客から注文を受けて、花火舟の上に立った花火師が、花火を手にとって打ち揚げる簡単なものであった。また、その花火舟には、歌川国満の「新板浮絵両国涼之図」(20頁)のような感じで伴舟が付いた。

両国の花火は、時代がたつにつれて大掛かりな打ち揚げ花火や仕掛け花火となり、夏の夜空を光と音で演出したのである。(小澤 弘/調布学園女子短大教授)

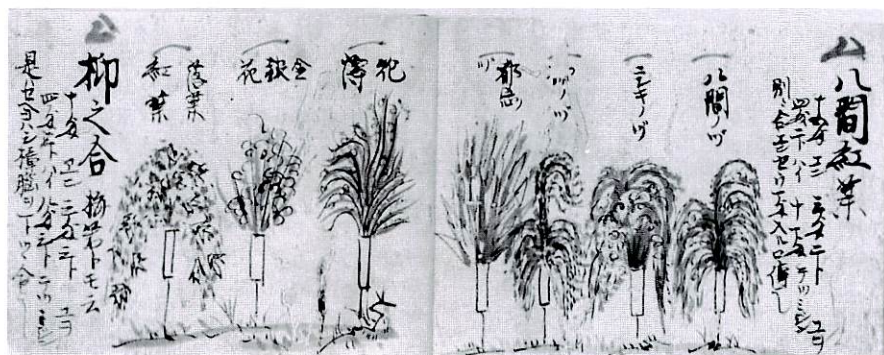


▲6. 歌川広重 I 「両国納涼大花火」

収蔵資料解説 — 花火コレクション —

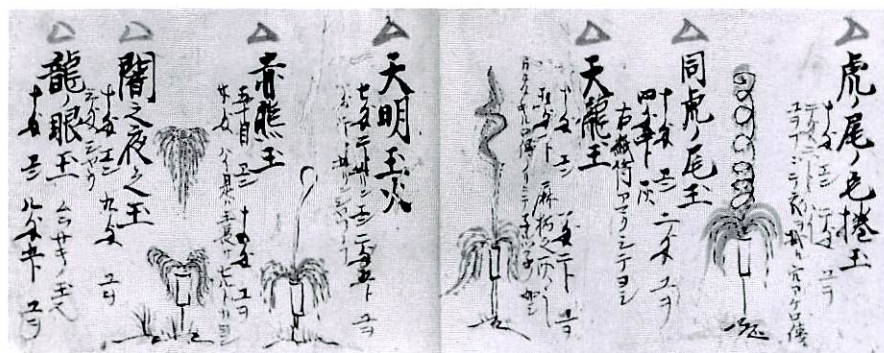
「両国橋の賑わい」「源氏絵の花火」などテーマごとに収蔵資料を分けた上で、描かれた人物、事物等、背景の細部にまで目を凝らします。そこには、何がみえてくるのでしょうか。

(資料の番号は、60頁からの資料一覧と一致する)



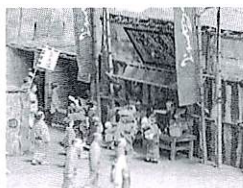
- ▼ 5. 歌川豊国Ⅰ「無題(浮絵東都両国橋花火之図)」 豊国Ⅰによる5枚続きという珍しい錦絵、資料的価値も高い。「大阪下 女かる技」ののぼり、右端に見える屋方船上には木琴もみられる。



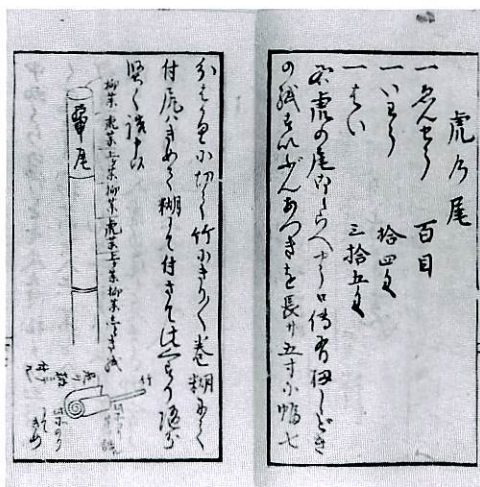
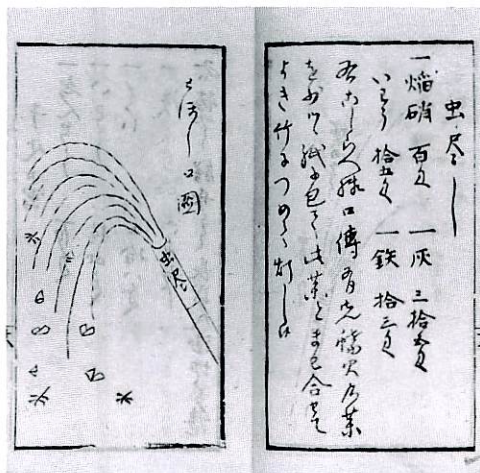


▲34. 花火秘伝書 唯心流の“秘伝書”。「合」と記述されているが、現在は星と呼ばれる火薬の配合を中心に彩色も施された写本。ところどころに「口伝」との記述があり文字通りの秘伝書といえる。ただし、この唯心流についての詳細は不明である。





◀芝居小屋の正面
(両国橋西詰復元模型、
江戸東京博物館)

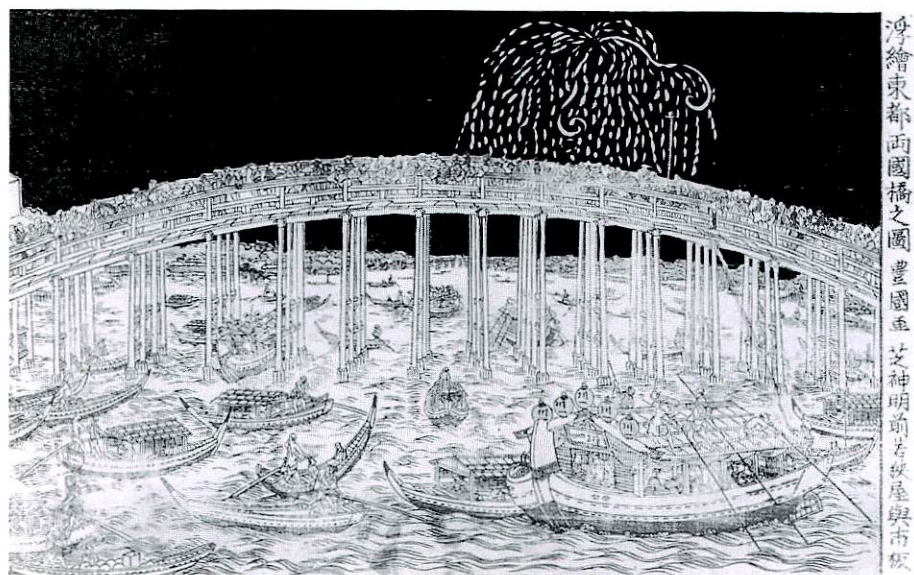


▲33. 花火秘伝集 版本で出回ったと思われる“秘伝書”。庭花火といわれる玩具ものから打揚ものまで幅広くふれられている。

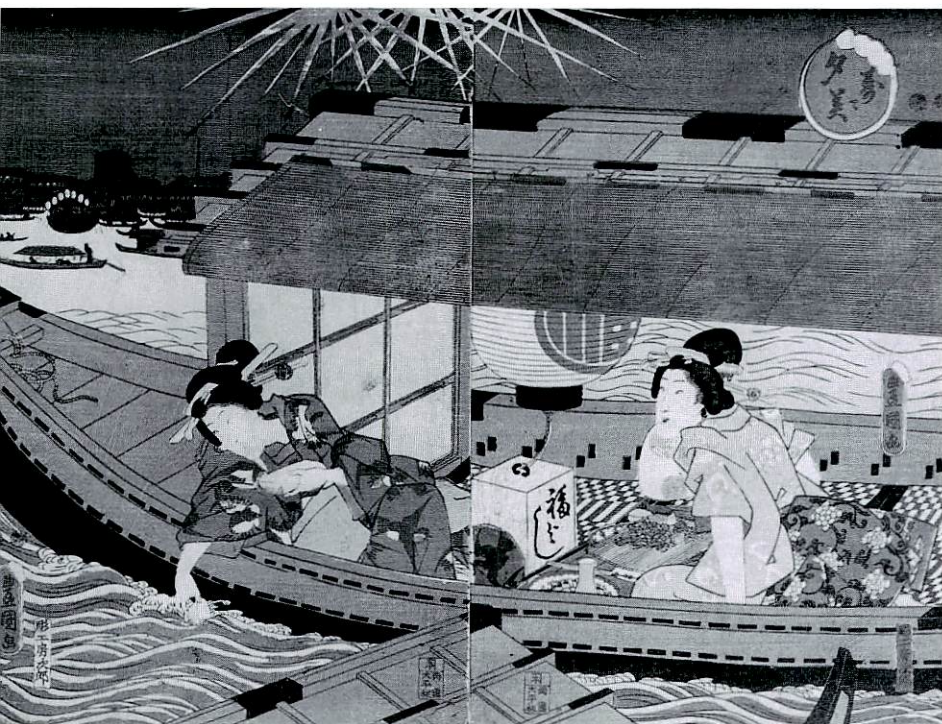
手筒と打ち揚げ

▼9. 歌川豊国Ⅲ「夕寿々美」

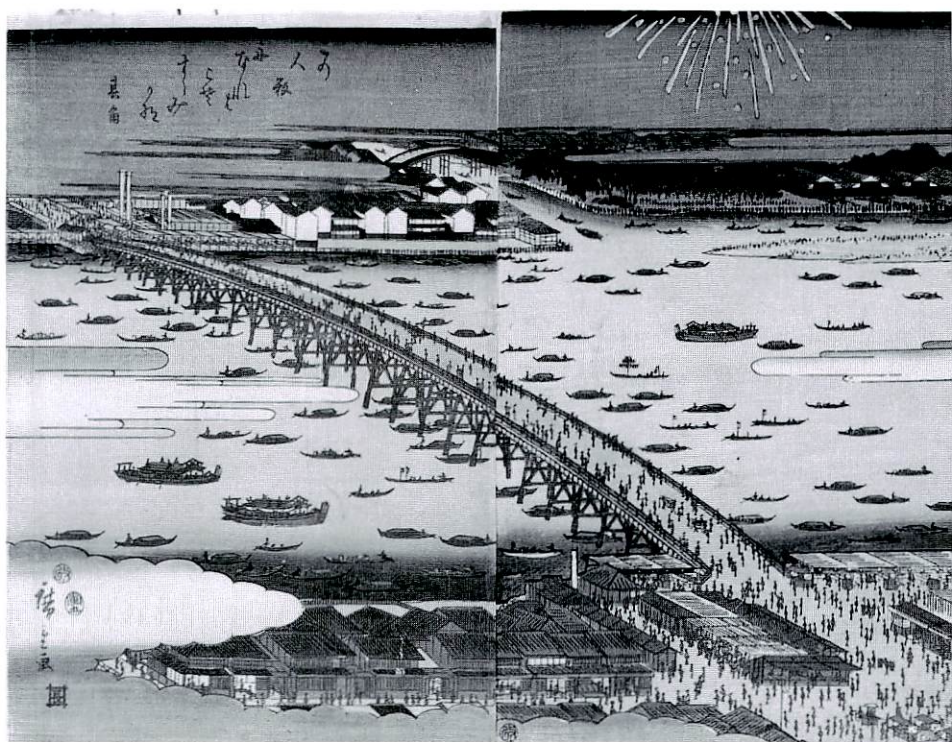
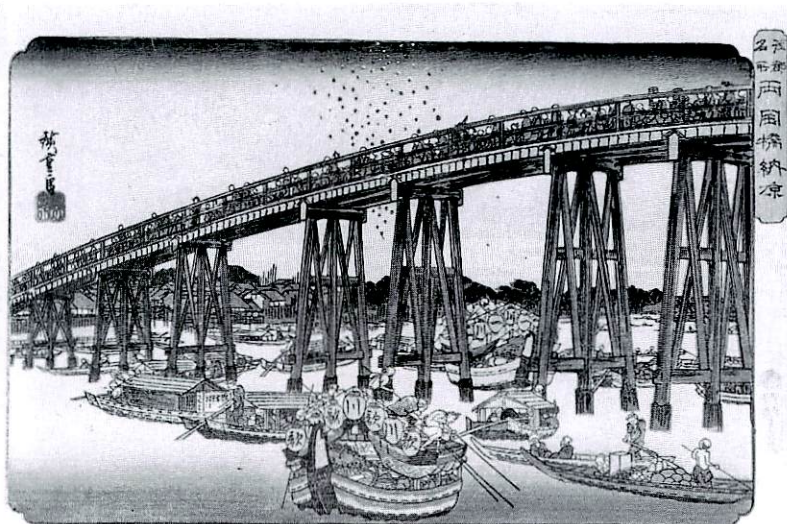




▲ 21. 歌川豊国 I 「浮繪 東都両国橋之図」



8. 歌川広重「江戸名所 両国橋納涼」



22. 溪斎英泉

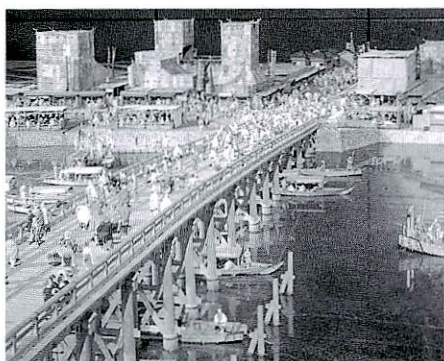
「新版浮絵江戸両国橋納涼之図」
文字とおり立錐の余地もない両国橋からの花火見物が描かれている。



- ◀13. 歌川広重「東都名所 両国夕涼」
宝井其角の句“この人数 舟なれば
こそ すずみかな”のとおり、両国
橋の賑わいは大変なものであった。

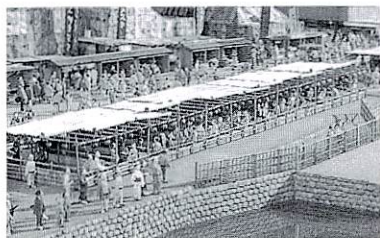


両国橋の賑わい

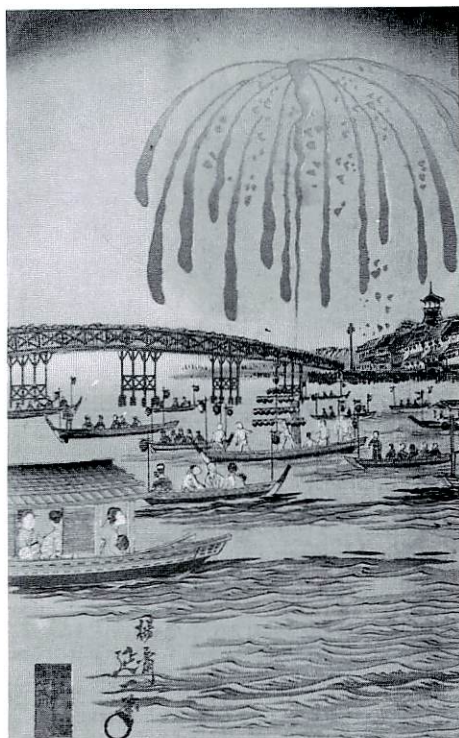


▲両国橋西詰（江戸東京博物館）

明治の美人と花火



▲大川沿いに並ぶ水茶屋
(江戸東京博物館)



▶ 27. 井上探景

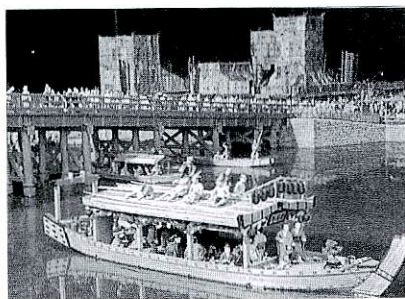
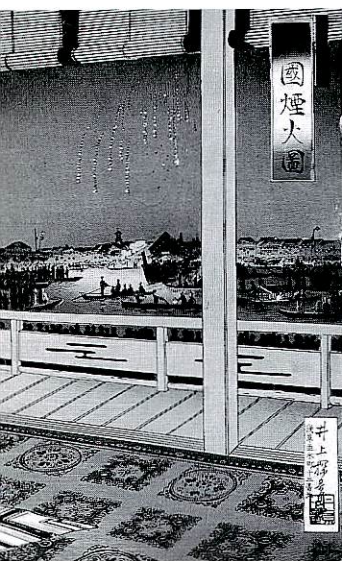
「両国煙火図」

明治の官女風宮廷絵。
宮廷風の水茶屋に描
かれているのは三味
線ではなく、琴、琵
琶。隅田川には蒸気
船も見える。



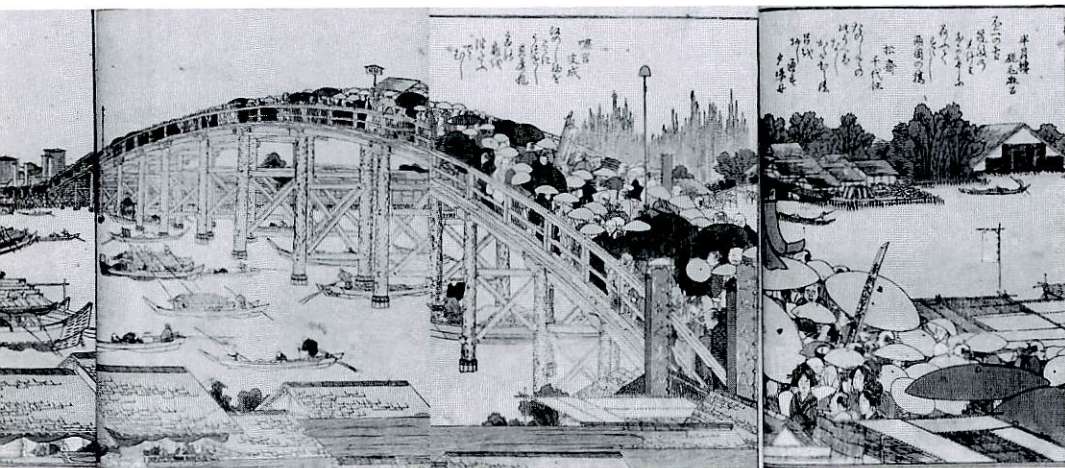


▲25. 揚斎延一「両国花火之三曲」
明治風の美人が乗っている屋形船の船頭もすでにザンギリ。背景の両国橋西詰も、江戸時代とは感じが違ってきている。

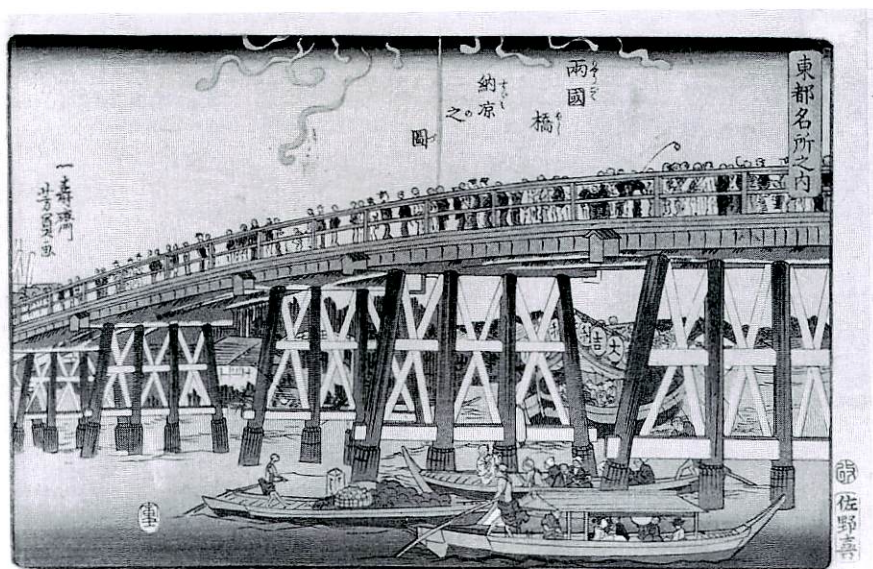


▲屋形船・高尾丸
(江戸東京博物館)

両国橋の昼と夜

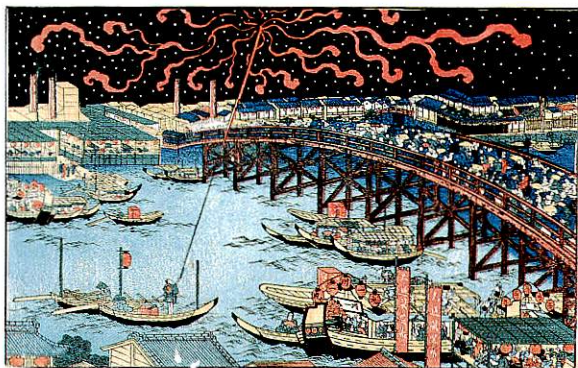


▲35. 葛飾北斎画「隅田川兩岸一覽」 葛飾北斎描くところの、隅田川兩岸の景観。花火が登場しない両国橋周辺の7月の賑わい。大山参りの人が持つ木太刀も見られる。



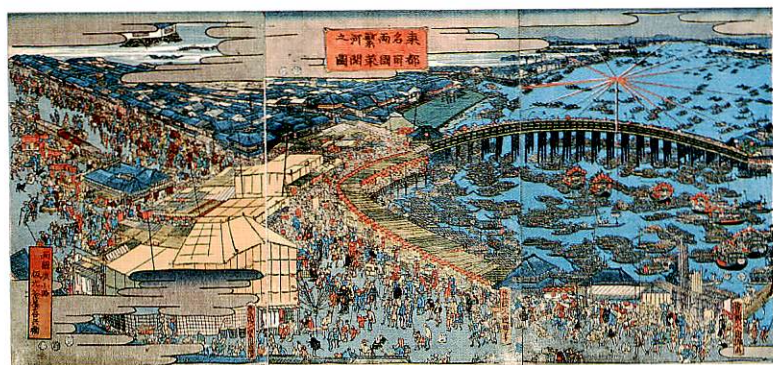
▲12. 歌川(一寿斎)芳員「東都名所之内 両国橋納涼之図」

▶ 4. 歌川(一翁斎)国満 I
「新板浮絵 两国涼之図」



▼17. 歌川豊国Ⅲ
「東都两国橋 川開繁栄図」





11. 歌川国郷
「東都名所 両国繁栄河開図」



花火の楽しみ方

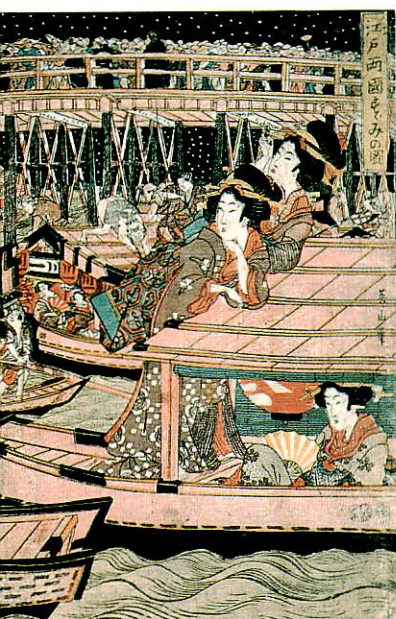


◀ 西瓜、瓜などの水菓子売り
(江戸東京博物館)





▲15. 歌川豊国Ⅲ「東都名所四季之内 両国夜陰光景」 水茶屋で花火を待つ宴。徳利、盃、盃洗などの食器類が描き込まれ、両国橋、屋形船は、シルエットで背景に浮び上がっている。



▲水茶屋の店先
(江戸東京博物館)

◀1. 菊川英山「江戸両国 寿々みの図」
背景に描かれた立錐の余地もない両国橋の花火見物は、宝井其角の句“この人数 舟なればこそ すずみかな”を実感させる。



▲18. 歌川房種「東都両国の夕涼」

柳亭種彦『修紫田舎源氏』の流行で、幕末の絵師はみな手がけたという源氏絵。
両国橋の向うには芝居小屋も見える。

源氏絵の花火



▲芝居小屋
(江戸東京博物館)

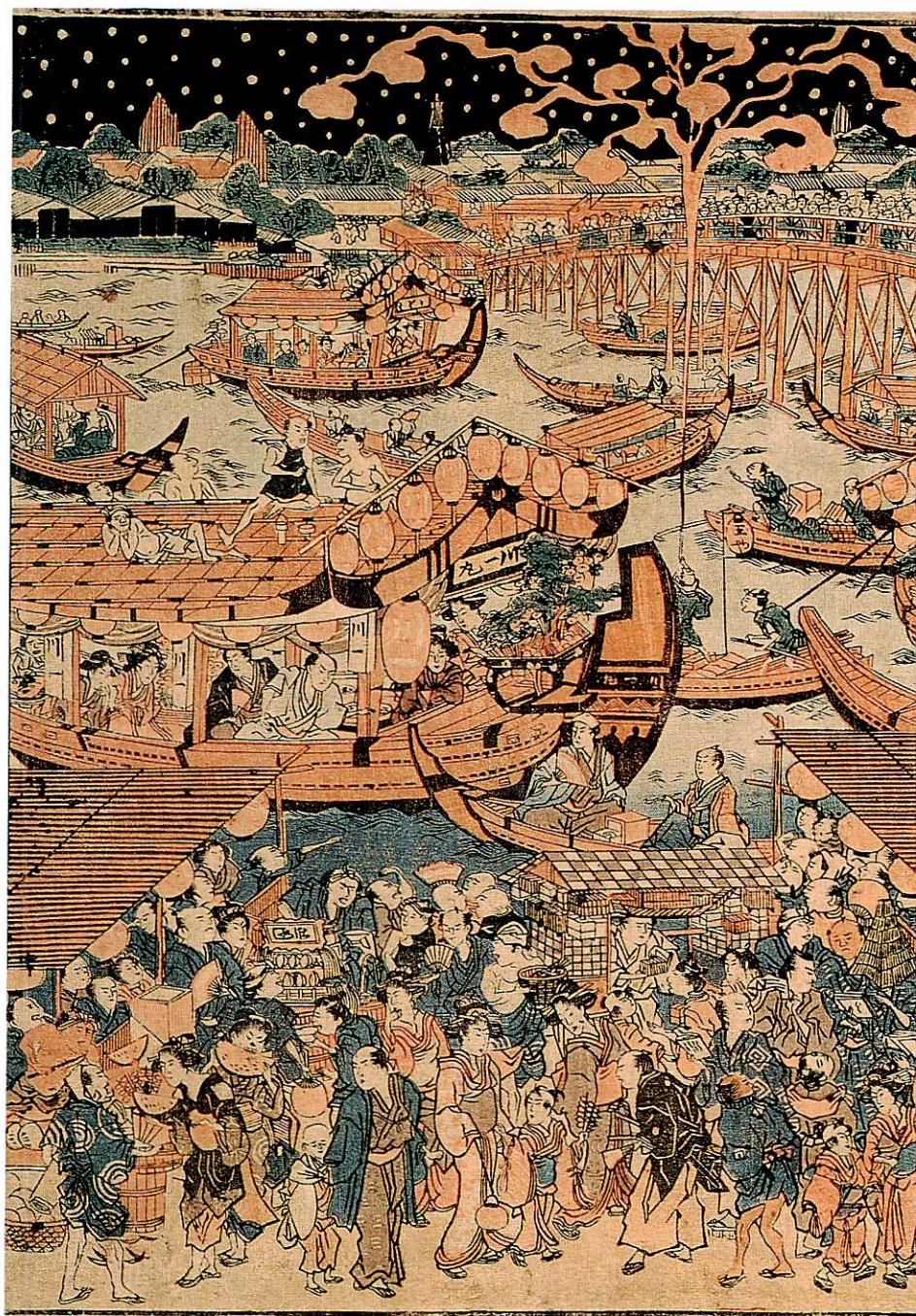
- ▶26. 歌川広重Ⅱ(喜斎立様)・豊原(歌川)国周
「東都両国 大花火」
こちらも源氏見立て。水茶屋の内部が御所
風となっている。



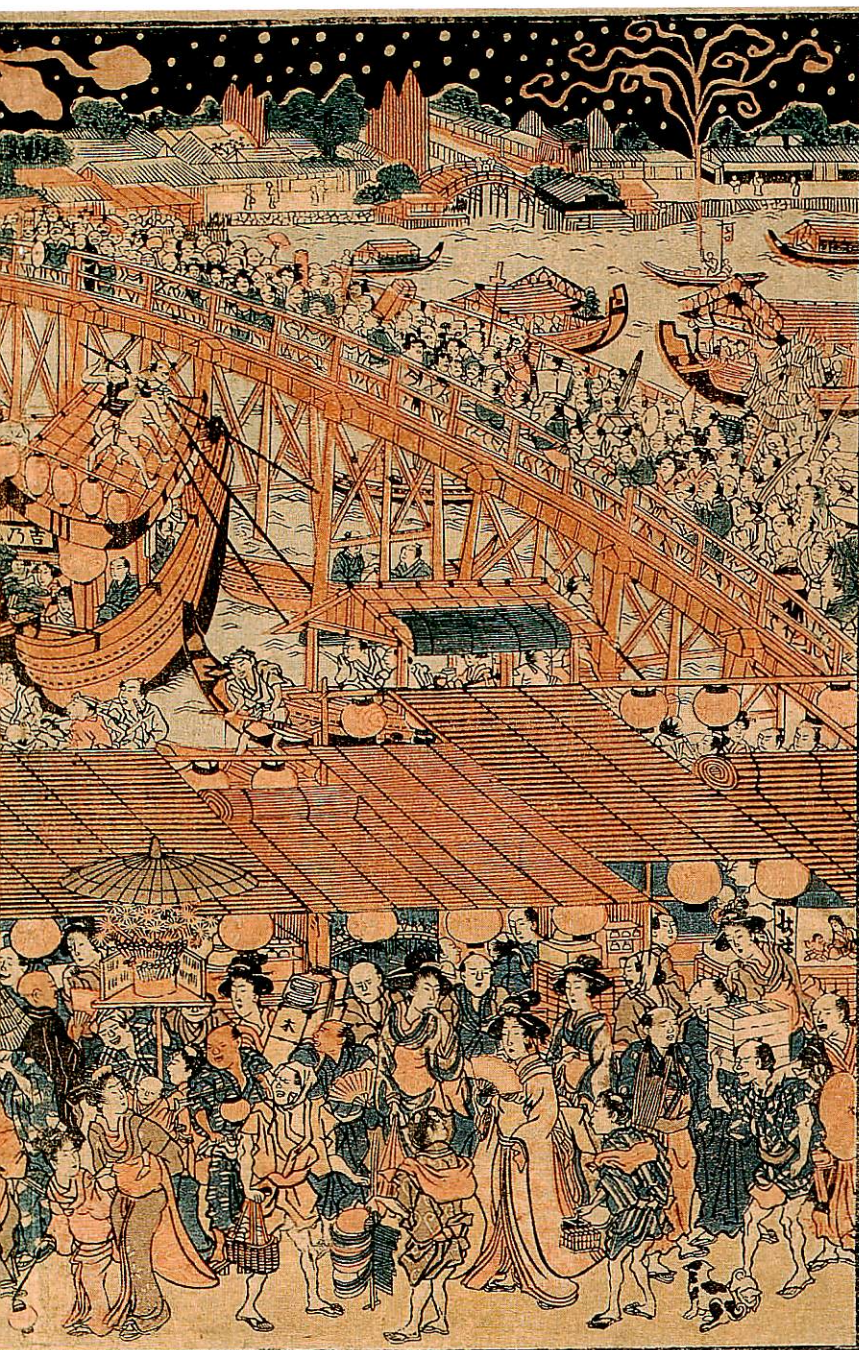


▲23. 歌川国貞（豊国Ⅲ）
「浮世名異女図会 江戸町芸者 兩國夕涼」





▲ 2. 喜多川歌麿Ⅱ「浮絵 江戸大川夕納涼之図」



浮繪江戸大川夕納涼之圖
 喜多川歌麿画
 版元 馬場町子目
 山口屋藤兵衛

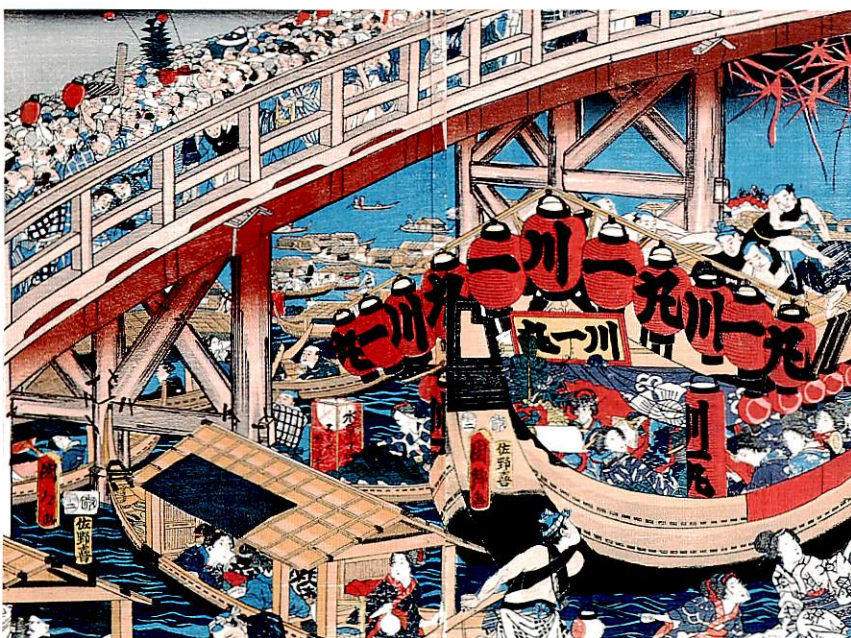
▼3. 歌川国丸「両国納涼図」

ここに描かれた川一丸、その他にも吉野丸、高尾丸といった大型の屋形船からみる
花火はより一層の涼を誘った。



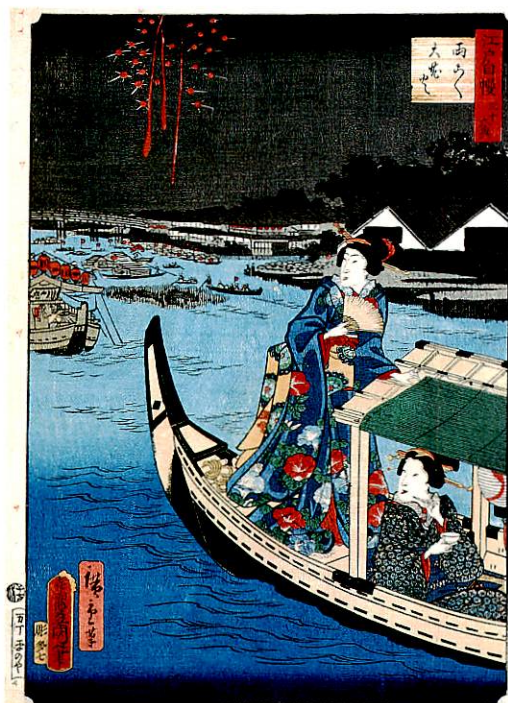
▼14. 歌川国郷「東都名所 両国夕涼の図」

川一丸の近くには、水菓子などを売る「うろうろ船」と呼ばれる船も見える。

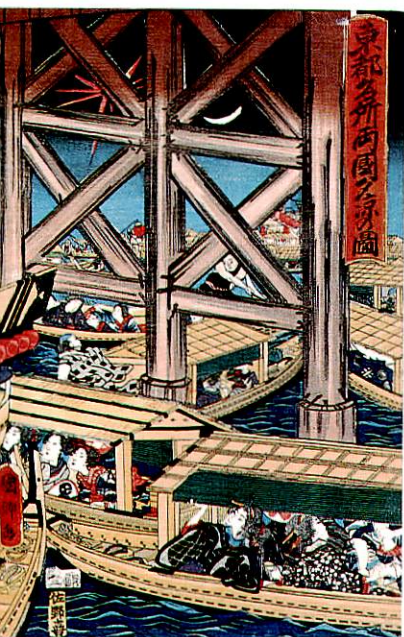




川一丸かの みる花火



▲20. 歌川豊国Ⅲ・歌川広重Ⅱ
「江戸自慢三十六興 両こく大花火」



◀提灯売り
(江戸東京博物館)



19. 歌川広重II
「両国川開之図」

▼7. 歌川豊国III
「秀の山雷五郎、荒馬吉五郎、小柳常吉」



▶ 30. 豊原国周・井上探景
「両国大花火夕涼之景」

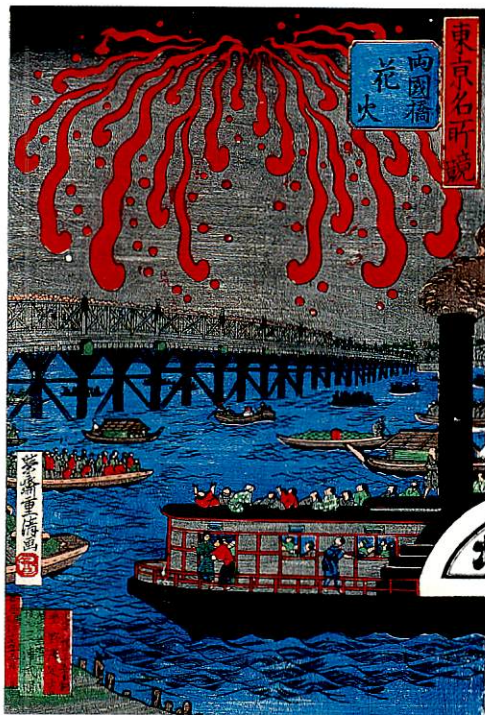


明るくなった 明治の花火

▼28. 紫斎重清

「東京名所競 両国花火」

花火が明るくなっただけではなく、錦絵の方も絵の具が変わって色がきつくなった。



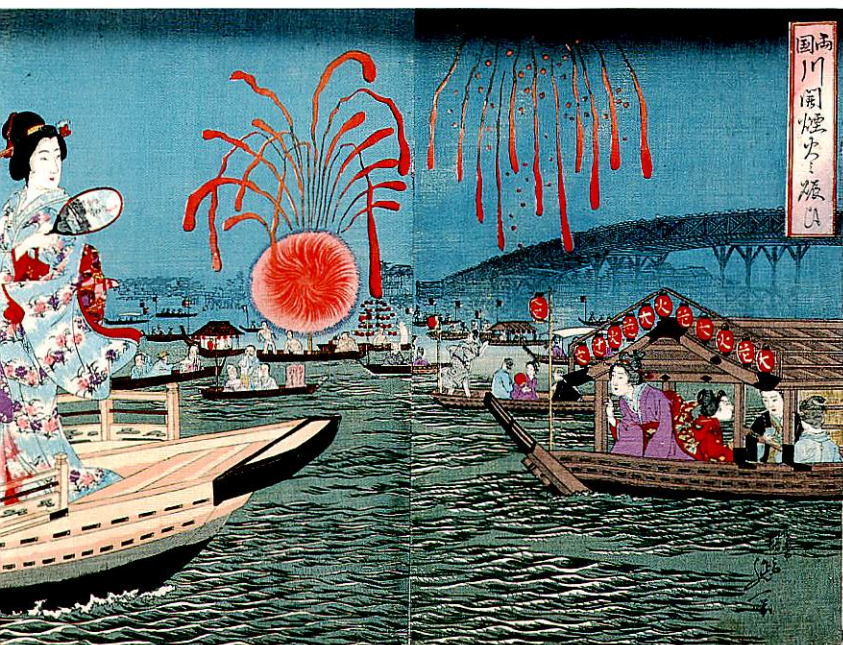
▶29. 揚洲周延「両国川開の花火」

美人の乗る屋形船は“明治丸”と記されている。こちらの花火も江戸時代のものとは比べ、相当明るくなっている。



▼32. 揚斎延一「両国川開煙花の賑い」

花火が明るくなっているが、新たな薬品の流入により鮮やかな色が出せるようになった。背景に影芝居が描き込まれている。



東京の花火見物

▼31. 薫洲周春「金親楼 両国橋大花火之真図」

通運丸が描かれている。

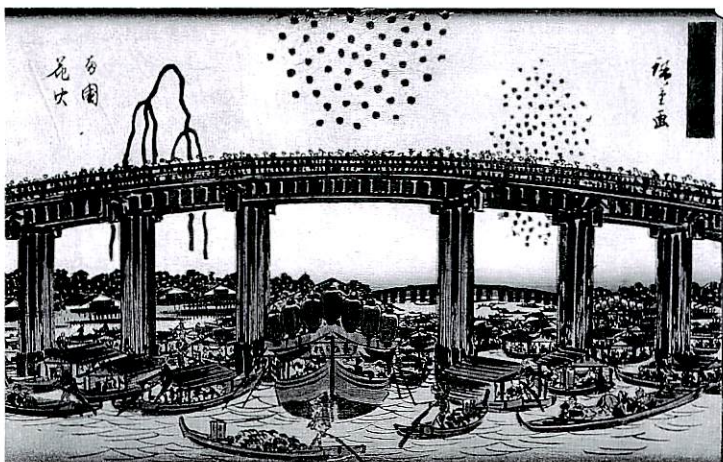


▲24. 落合芳幾「東京両国川開之図」

維新後の江戸はしばらくの間、東京と東京が混用された。東京はトウケイと読む。この絵の左端に見える屋形船も「東京丸」と記され、同じ絵の中にも東京と東京が混在している。

作者概説 — 花火を描いた絵師たち —

花火コレクションの主要な絵師について紹介する。『浮世絵の基礎知識』『原色浮世絵大百科事典』『浮世絵類考』(*)などを参考にした。初代、二代はローマ数字Ⅰ、Ⅱで示した。



▲歌川広重Ⅰ 10. 「江戸名所 両国花火」

井上探景 (1864～1889) 月岡芳年、小林清親門人。始め井上安次といい、明治17年から探景の落款を使う。風景画は詩情に富み師清親に迫るが、晩年の三枚続きは他の明治錦絵に近く、特色がない。
歌川国郷 (不明～1856) 歌川国貞Ⅰ門人。尾張町(東京都千代田区)に住む。
歌川国丸 (1793～1829) 国直、国安とともに豊国Ⅰ門下の三羽鳥の一人といわれる筆達者であった。美人画、浮絵の他、挿絵が相当数ある。37歳で没した。

歌川国満 号一翁斎、豊国Ⅰ門人。俗称熊蔵。彩色に優れた錦絵、草双子など多くの作品がある。

歌川豊国Ⅰ (1769～1825) 歌川豊春の門人。天明の頃より美人画、役者絵、絵本、合巻等広い分野で活動。山東京伝、式亭三馬、滝沢馬琴等の挿絵はほとんど彼が描き、また国政、国貞、国芳など多くの門弟を育て歌川派の主流を築いた。

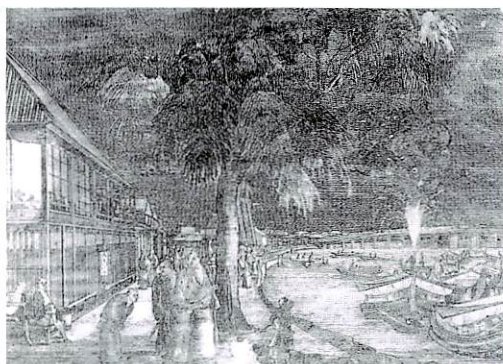
歌川豊国Ⅲ (1786～1864) 豊国Ⅰの門人。時代の粋な女性像を表した美人画、挿絵、役者絵に力作が多い。はじめ国貞

を名乗るが、豊国Ⅰ没後、豊国Ⅱがいるにもかかわらず、二代を襲名した。実際には三代。浮世絵界一といわれる作品数は、その人気の高さをよく示している。

歌川広重Ⅰ (1797～1858) 江戸定火消同心の安藤家に生まれる。16歳で歌川豊広に入門し、はじめ役者絵、美人画等を描く。やがて、東海道五拾三次シリーズを発表し、風景画家としての名声を得た。その後、種々の名所絵の傑作を生み、また花鳥風月にも腕をふるった。

歌川広重Ⅱ (1826～1869) 広重Ⅰの門人で、安政6年、師没後に長女お辰の婿となり二代目を襲名した。初代の画風をそのまま習い、風景画、美人画などを描く。慶応元年、お辰と離別、以後は喜斎立祥と画名を変えて横浜に住み、輸出用茶箱の絵を描いたりした。

歌川房種 (生没年不詳、活動期安政～明治20年頃) 歌川貞房の門人。本名・村井静馬。「近江八景」シリーズ、芝居絵、源氏絵シリーズ。明治に入って「東京名勝」の他、新聞、小説の挿絵なども描く。



▲「両国夕涼図」（須賀川市立博物館蔵）

歌川芳員（生没年不詳） 一川氏、一春斎とも号した。国芳門人。音羽町（東京都文京区）に住んだ。武者絵をよくし、草双子や錦絵も数多く手がけた。

落合芳幾（1833～1904） 歌川国芳門人で芳年と競いあう。芳年と「英名二十八衆句」など血なまぐさいものを描く。また、開化絵にも興味を持ち横浜絵を描いた。また『東京日々新聞』の挿絵を描き、その分野のバイオニア的存在となった。

菊川英山（1787～1867） 菊川派の祖。父・英二（狩野派門人）及び鈴木南嶺に画を学ぶ。天保中期に大錦タテ二枚つぎの美人画を創案した。その作品のほとんどが美人画である。

喜多川歌麿Ⅱ（文化～天保年中） 戯作では恋川春町と称した。本名・北川、俗称は鉄五郎。書をよくし、歌麿Ⅰ没後、その妻に入夫という説もある。晩年の歌麿Ⅰとよく似た作品を描いた。

薫洲周春（生没年不詳） 豊原国周門人。

溪斎英泉（1790～1848） はじめ狩野派に学び、後に菊川英山とともに浮世絵をはじめめる。文化末頃から狂歌本等の挿絵や役者絵を描くが、やがて濃艶な美人画に本領を発揮する。洋風の風景画にも技

量を有し、また藍摺の創始者とも伝えられる。晩年は戯作も書き「続浮世絵類考」など考証も手がけた。

紫斎重清（生没年不詳、活動期は安政～明治20年頃） 広重Ⅰに入門、幕末には「横浜往来」などの横浜絵。明治期には東京名所の他、蒸汽船、鉄道馬車絵がある。一時期、本名・野沢定吉で落款。

豊原国周（1835～1900） はじめ豊原周信に入門し、羽子板押絵を製作。のち豊国Ⅲに入門するが、歌川を称さず、終生豊原

を名乗る。明治役者絵の代表的存在で作品数も多い。大判三枚続に一人立ちの役者半身を描く新しい構成も案出した。

橋本周延（1838～1912） はじめ国芳、国貞Ⅰ（豊国Ⅲ）に学び、一時一鶴斎や芳鶴Ⅱと称した。のち、国周門下に入り第一人者となる。大判三枚続の明治風俗画、「千代田大奥」シリーズなどで知られる。数少ない優れた明治の浮世絵師の一人で、屈指の美人画絵師であった。

揚斎延一（1872～1944） 橋本周延門人。美人画、風俗画、博覧会、憲法、国会関係の他、東京名所、日清、日露戦争関係など明治末年まで活躍した。晩年、肉筆画をかく。明治20年には石版画も描いた。

Ⅱ 花火、そのみどころ

夏の年中行事として、年々盛大になってきています「あつぎ鮎まつり」ですが、その歴史についてはすでにみてきました。

ここでは、「花火」そのものの歴史、奥深い花火の技術、仕組みなどから世界の花火事情まで、自らが花火師でもある日本煙火芸術協会顧問・武藤輝彦氏に詳しく解説していただきます。

一読すれば“花火のみどころ”などをご理解いただけるかと思います。

錦絵の花火はなぜ暗い？

実に多くの錦絵に花火が登場しています。これは、花火が江戸時代においても特筆すべき夏のイベントだったからでしょう。錦絵の花火はなぜ暗いのかという問題を出発点に、花火について述べていきます。

展示されている『花火秘伝集』には、「春八花 秋八月 冬八雪」とともに夏の景物として花火があげられています。しかし、錦絵の主人公はあくまで見物衆。その大多数は、イナセな役者、粋な芸者衆のクロースアップ、両国橋周辺の雑踏などが中心に描かれ、花火はそのバックを構成しています。花火が主役となったものは少なく、昔も今も花火を絵にすることは難しいことのようにです。

錦絵に描かれた花火をよくよくみると、時代によって変わってきています。

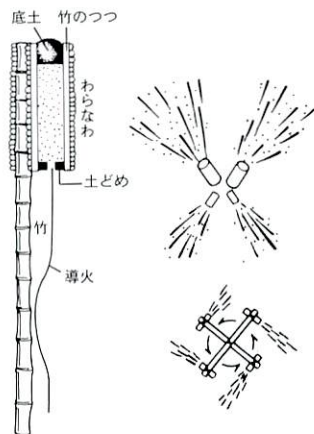
日本で初めて花火らしい花火を見たのは、徳川家康。慶長18年(1613)8月6日、駿府城で、唐人の作った噴出花火だったというのが定説になっています。この花火は、現在の玩具花火「ドラゴン」と同じ、筒から火花を噴出させるものであったようです。炭の粉が燃える程度の色なので、旧暦2日という月の出ない闇夜を選んで供覧したといわれています。

この噴出花火は、今でも「大筒」とか「手筒」として各地に残っていますが、当初はこの筒物が花火の主流をなしてい

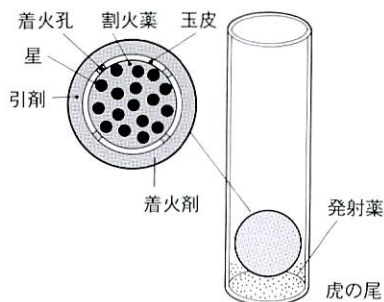
て真っ直ぐ立てるだけでなく、竹に付けて打ち上げると火箭(竜勢)となり、いわゆるロケットとして上空にあげることもできます。これを、回転棒の両端につければ「火車」となり、さらに四方に噴き出すと「蝶」になります。また、これを何本も並べれば「日の出」にもなったので、この種の仕掛け(からくり)は多数登場しています。

暗かった和火

次に目立つのが「虎の尾」でしょう。地上から太い炎がのぼり、やがて落ちていく—これは当初、火薬で作った「タドン」で、導火線(打ち揚げてから玉の開発するまでの延時をとるための部品)がなくても大空に打ち出せたわけです。しかし、芯までタドンだと燃焼時間が長すぎ、地面まで火が落ちることになり、芯を泥にしたり紙の玉皮にし、さらに今ではその玉の中に「星」を入れて変化をつけるようになりました。星とは、花火の光る素となるもので、火薬を固形体としたものです。



▲火箭とその応用例(上が蝶、下は火車)



▲虎の尾とその打揚法

現在の花火玉のように、玉に導火線を付けて打ち揚げる方式は江戸時代中期以降だと思われます。白い丸い球の中に赤い星粒が丸くなったものなどが描かれています。明治以前の日本の花火は、その材料が限られていて主として硝石（硝酸カリウム KNO_3 ）と硫黄（ S ）と木炭の三味の配合をいろいろと工夫していました。これがいわゆる黒色火薬で、その色は炭の燃えるものでしたから、現在の花火のような華麗で多彩な色とは程遠いものでした。この時代の火薬による花火を「和火」といっています。

硝石、硫黄、木炭の他には鉄粉、明礬、樟腦、膠、糊、木粉など限られたものでしたので、花火師もいろいろと苦心をしたことでしょう。特に、木炭についてはそれぞれの材質によって火付きが良かったり、火の粉が出たりなど、いろいろな性能を考えて使い分けられ、麻、三稜、桑、竹、松、桐、桜などが主に用いられていました。

木炭も使い分ける花火師

伝説によりますと、赤い花の咲く木の炭は赤く、紫のものは紫になるということで、牡丹や茄子などの木も炭にしたといわれています。ハナシとしては面白いことです。いずれにせよ、日本の花火は今でも木炭を使い分けていますが、外国では全て「カーボンブラック」で済まされています。

特に、硝石のできる色に「大白星」という配合があり、やや明るい光が出たようです。しかし、電燈もネオンもない時代です、月がなければ空そのものも暗かったので「炭の燃える色」でも鮮明に見えたことでしょう。特に、毎年墨田川で打ち揚げられた川開きの花火は、両国を中心とする納涼アミューズメントシーズンの幕開けになるもので、旧暦5月28日の

闇夜の晩に開催されています。

当時は、8月28日まで3ヶ月間大川（墨田川）端にお茶屋や見世物がならび屋形船に芸妓を侍らせて夕涼みをするのが風流人のたしなみ。大川を上下するいろいろな物売り船の中に花火船があって、花火を打ち揚げました。

一両の花火間もなき 光かな
という宝井其角の句のように花火は贅沢品でした。

さらに錦絵の中には、太い花弁が広がるものや、小さな玉がいくつもはじける雷鳴ものなどいくつかの花火をみるができます。明治時代になると、風船や旗、テープなどが登場しています。

明治の大革新！洋火の登場

和火と呼ばれていた地味な花火の色が大きく変るのは、明治に入って、いろいろな化学薬品が輸入されてからです。明治10年頃からマッチの頭薬に使われる塩素酸カリウム（ KClO_3 ）が酸化剤（酸素供給剤）として利用できるようになり、硝石ではなかなかできなかった金属化合物の炎色反応を可能にしたのでした。まず、バリウムで緑の色が得られ、次々と明るい色が登場しました。この新しい花火は「洋火」と呼ばれています。

- ・赤色は、ストロンチウム
- ・黄色は、カルシウム、シュウ酸ソーダ
- ・青色は、花緑青、酸化銅
- ・白色は、アルミニウム

など、各種の炎色剤が活用され日本の花火は大きく変わりました。塩素酸カリの効果は、炎色ばかりでなく、高い冴えた音を生むようになりました。しかし、摩擦や衝撃に敏感で、発火しやすく多くの事故を引き起こしました。特に、塩素酸カリと硫黄の配合は危険で、東京警視庁は昭和5年に使用を禁止するに至りました。

花火のしくみ

— なぜ世界一か？ —

日本の花火はどんな構造なのか、なぜ華麗な「華」を咲かせるのかといった点にふれてみましょう。花火は、構造、機能から大きく三つに分類されますが、それらについて説明してみたいと思います。

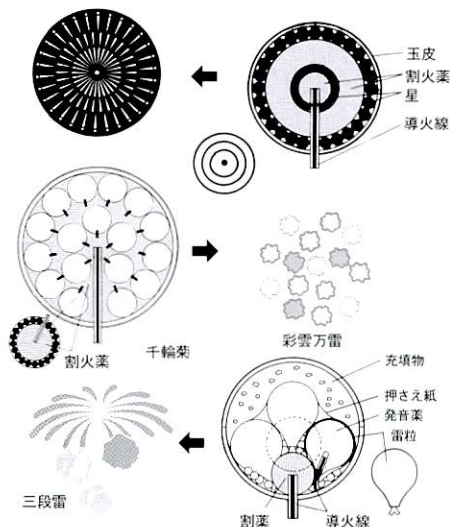
花火は、構造、機能によって、割物、小割物、ポカ物と大きく三つに分類されます。その中で、日本独特のものが割物と呼ばれる花火です。

- ①星の色がvari、一斉に消える
- ②花が真ん丸く、大きく開く
- ③一重でなく二重、三重の同心円（球）を描くことができる

この三点が、割物の特色です。日本の花火は玉皮といわれる球状の容器に入っていますが、アメリカをはじめとして諸外国では、円筒型の容器が主に使用されています。

飴菓子のvari玉と同じように、違った色を何層にも重ねる変化星（掛星）は、単色の火薬をプレスする外国の星より、手間もかかり、危険度も高いのです。この変化星を球状の玉皮にならべ、遮断紙を敷いて、中央に破弾薬（割粉）をぎっしり詰め、外周を丈夫な紙で何層にも貼って固めます。この破弾薬の威力と外周の貼りのバランスが合うと、大きく真ん丸く開発します。破弾薬が強すぎると全部の星に火がつかず、歯抜け花火になり、貼りが均一でないとラグビーボールのように歪になります。外国の円筒型の花火は、星を均一に四方八方に飛ばすことができず、ダラリと柳の枝のように垂れ下がり、当然大きな広がりには望めません。玉の寸法が小さい場合、その差は目立ちませんが、5号玉（直径15cm）以上になると大きな差がでます。

先人たちは、特に破弾薬の構造についても細かな配慮をし、粉状の火薬をそのまま玉に込めず、大小さまざまな固体にまぶして、接触面を広くし、パッキングを兼ねて隙間を多くするようにしています。小さな4号玉（直径12cm）以下なら、米や麦の粉殻、5～7号玉には綿や杉の実、2尺玉など超大玉ならやや大きなコルク片、松ボックリなどに黒色火薬をま



▲割物、小割物、ポカ物とその構造

ぶしてそれぞれ使い分けます。導火線の火が破弾薬についた時、火の回りが早く瞬時に威力を発揮させることを考えます。外国では粒状火薬に大小2種類の大きさを作っているに過ぎません。

作者の個性がでる花火

日本の花火師たちはどうしたら真ん丸く大きな花が開き、星がパツパツと一斉に色を変え、パツと消えるかということに心掛けます。そのためには、玉の端に着火させるよりは、玉の中央で点火すればより一層真円を描くと考え、あまり長くない導火線を延長させるという工夫までしています。

花火師には、それぞれ流儀があり、その極め方も異なります。同じ割物でも、星の大きさの大小や、真ん丸く開かせるための秘訣である割り（破弾力）と貼り（外周の強度）のバランスにも個人差があります。割りをやや弱めにし貼りを充分にしますと、開発した星がスーッスーッ

と伸び広がります。逆に割りを強めにして貼りをやや少なめにとすると、パーンと景気よく星が四散します。花火師の好みや性格は、このあたりによく現れるので、見慣れてきますと、玉の開発状況、炎の色具合で、長野の玉、茨城の作、さらに何某の花火と判断できるのです。

日本の花火師の最大の技巧は、同心円（球）を二重、三重に作る芯物花火にあるといえます。二重を芯物、色が変れば「変芯変化菊」、三重を八重芯物、四重を三重芯といっています。この八重芯物を抜芯方式で完成した功労者は、長野の故青木儀作氏です。芯物花火の作り方にいろいろと方法がありますが、薄い丈夫な雁皮紙を活用して作る「抜芯」という方式は、器用な手先と根気を要する細工です。主として7号玉（直径21cm）以上で作られる八重芯物は最も華麗で最高の技巧品といってよいものですが、生前青木名人は「年に100くらい八重芯を作るが、本当に満足できる作品は2つか3つだ」と語っていました。一瞬に決まる調和美、やり直しが許されない花火芸術には美の極地がこめられています。

最近の花火大会は、一度に沢山の花火を打ち上げるスターメイン（連発仕掛）が呼び物です。確かに“きれい”ではありますが、一つ一つの玉は“化学的現象”に止まっています。また、花火師の技量にも個人差があり、絶品に接するためには花火大会も選ばねばならないようです。昨秋には、尺玉（直径29.2cm）に五重円が試みられるようになりました。

変化の多いボカ玉

ボカ物というのは、玉が上空でボカッと二つに分れ、中からいろいろな星や細工物を放出させる花火で、一瞬に消えず、破弾薬は少量、開発の広がりも狭く、種類の多い花火です。ボカ物は、大別する

と、柳物、落下物、段咲物、吊物、袋物（主として昼間）など5種となります。昼間の信号雷は、代表的な段咲物。ピーツと笛音のするものが落下物。パラシュートで吊る吊物は昼夜ともいろいろありますが、街中では禁止の状況です。

小割物というのは、小さな小玉や雷粒などを沢山詰めて一斉に開発させるもので、破弾薬は割物とボカ物の中間、開発の広がりも中間になります。これもいろいろな組合せがありますが、小さな吊り星を沢山浮かべる緑光の“小割松島の景”紅光の“田毎の月”など昔ながらの優雅な花火も見られます。

割物には調和美を求める菊や牡丹の他に、太い花弁が出る椰子、星が大きく垂れ下がる冠菊、左右の色が違う染分物、菊に輪を加えた覆輪菊、ひまわりなどもあります。最近では、「型物」といって、帽子、魚、ハートなどを大空のキャンバスに描くことが流行っています。調和された“整”だけでは単調なので、“破”に変化を求めているのです。ただ、この型物は新しい創作というわけではなく、明治の終わりに流行った技法なのです。当時、星はまだ単色の丸い菊だけでしたので型物に変化を求めたのでした。

大空に、イロハ、ABCなどの文字を描くことは容易です。ただ、平面にすることは可能でも方向を一定にすることはできません。魚を打ち揚げた時に、見る方向によっては鯛になり、或いはサンマ、メダカにも見え、そして何も分らない死角もできてしまうことが、型物の特徴であり欠点といえます。

さらに新しい傾向としては、ピカピカと点滅する星、ピューツという笛音とともに乱舞する玉、不規則な動きをする遊飛星など変則的な“動き”を追うようになってきています。

木炭、和紙、糊

—花火を作った三素材—

日本の花火を育てたものは何か、また誰なのか？という問題にふれてみようと思います。木炭、和紙、そして糊。私たちの身近にある、この三つの素材が精巧な割物花火を生み、育ててきたのです。

木炭については、すでに述べましたようにいろいろと使い分けられてきましたが、和紙についても同じようなことが行われてきました。

丈夫な生紙、美濃半紙に代表されるコウゾ・ミツマタ紙は、花火を仕上げる“貼り”に活用され、薄くて丈夫な雁皮紙はバラシュートや袋物に用いられる他に、打揚玉の遮断紙、また八重芯を作る時の“抜芯”作業に欠かせません。雁皮紙は第二次世界大戦の折、茨城の海岸からアメリカへ飛ばせた風船爆弾の主役。この雁皮紙をコンニャク糊で貼り合わせて作ったといわれています。

今も昔も貴重な反故紙

また、打揚玉の生命ともいえる導火線は、現在でこそ大手火薬メーカーの作る“親導”に依存していますが、二昔前までは花火師が夜なべに巻いたものです。この作業には、丈夫な美濃紙とやわらかな吉野紙が欠かせません。吉野紙は、江戸の吉原で貴重品だったという最高のチリ紙です。30cm足らずの鉛筆程の導火を一本一本指先で堅く巻き込むのですから個人差があり、出来不出来もあり、満足には打ち揚らないことがママあったのです。玉に貼る和紙は少量ではありませんので、反故紙が活用されました。そのため、多くの古い記録、古文書などが打揚玉と一緒に空に散ってしまいました。歴史の先生からは「大切な古文書をなくした元凶でも、経師屋の方は襖をはがせば読むこともできるが、花火師は焼失させてしまったのだから罪は深い」と叱られたことがあります。しかし、今ではそうした反故紙を探すことも難しくなり、機械漉きの和紙やセメント袋、ハトロ紙で代用しなければならなくなりました。

線香花火に代表される撚り物玩具は和紙がなければできません。このような理

由から、玩具花火の産地が和紙の産地でもあるという例は少なくないのです。

米糊の粘着力は最高

糊も花火生産のポイントといえます。変化星を作るときミジンコ（餅米粉）を粘着剤にしています。水を加えることで十分な効果がでることは作業を容易にしています。外国では化学糊を使うので、溶剤も必要になってきます。

打揚玉の外周は、丈夫な紙で幾重にも貼りますが、尺玉（直径29.2cm）の場合は50重にもなります。こうした作業では、どのような糊を使用するので、成果も作業効率も違ってきますので、花火師はそれぞれに工夫をこらしました。昔々（昭和初期）、西は大阪、東は東京と東海道を股にかけて活動した愛知の成瀬という花火師は、製造が間に合わず、飯粒をつぶして練った“ソクイ”という強力糊を作り、目的地へ向かう列車のなかで紙を貼り、花火玉を仕上げたという伝説があります。現在のバンドと同様、特に乾燥させないでますんだといいますが、木（炭）と紙、さらに米食に馴染んだ日本人の生産といえるようです。

安全な配合を求めて

多少カビ臭い話をしてまいりました。今は、紙も手漉きでない機械漉きしか入手できない時代となり、花火に使用する薬品もそれに対応した新素材ができています。洋火の立役者である塩素酸カリは、摩擦、衝撃に敏感で事故多発の原因となり、昭和35年に火薬類取締法を大改正する事態を招きました。これを契機に、花火作りから塩素酸カリを追放、比較的安全な過塩素酸カリウム（過塩素剤 KClO_4 ）におきかえる運動が始まりました。

花火に事故はつきものと考えられていた30余年前には、全国で年間35名余の犠

性者を出していました。やや安全な過塩素酸カリウムを採用することは“燃えにくい”ということでもあったわけで、塩素と同じ美しい色を生み出すために、多くの苦労を要しました。従来は企業秘密としていた研究成果を相互に公開し、何度も実験を繰返すなど、業界あげての努力の結果、ようやく過塩素の使用が定着し、製造中の事故も減少しています。

明るい光を求め、マグネシウム、マグネリウムを加えるようになりましたが、ともに水分に弱く、腐食しやすいので被覆したり、溶剤を使用して星を造粒することでピンクや紫などの中間色を生んでいます。また、宇宙ロケットに使われているチタン合金の粉末は、燃焼を促進する効果があり多用されています。

従来、打揚玉の容器には紙の使用が主流でしたが、海外ではプラスチックを使用するようになっていきます。プラスチックの使用により、色々な面で作業工程の簡素化が可能です。しかし、打ち揚げ後に残るカスが問題になり、特に畠地などに隣接して打ち揚げられることの多い日本では“公害”になりかねませんので、使用を避けています。花火大会後、散らばったゴミの整理も花火屋の仕事です。

また、花火の音がうるさいという苦情も絶えません。西武球場ではホームランが飛出すたびに花火を揚げていますが、定刻に始まる花火大会と違い、いつ何時ホームランが出るかわかりませんので子供の安眠妨害だとクレームがつくのです。そこで、なるべく音の小さな花火を打つことが要請されています。ゴミの少ない、音の小さい花火を作るとは、花火師の今後の課題かもしれません。

奉納花火で技術の保存

日本の花火は、誰がこの伝統を育ててきたのでしょうか。

火薬と縁の切れない砲術師が、徳川の平和な時代になって、その技術を転用し、花火をみせることを考えました。徳川親藩や加賀、仙台などの雄藩では、大川端の別荘で夏の納涼行事として花火見物を楽しんだといわれています。一方、幕府は火薬をみだりに持たせることを禁止したため、神社の祭事に花火を奉納することなどで民間にその技術を伝承させたと考えられます。花火奉納の祭事が現存している地域は、おおむね天領で、小藩はそれもできなかったのでしょう。

専業で花火を作るという商売は、江戸幕府御用達の鍵屋、幕府の火薬製造所の岡崎にあった2軒の硝石製造工場・煙硝屋と島清しかなかったと考えられます。

現存している伝統行事には、大筒、手筒と火箭（竜勢）、硫黄主剤の仕掛や綱火、それに打ち揚げもあります。250年の歴史をもつという長野県下伊那の清内路の花火は打ち揚げが主ですが、昔は竜勢も打ち揚げ手筒も盛んでした。しかし、竜勢は危険ということで禁止されたといえます。同じような例は三河地方でも聞きます。信州、三河、遠州などでは今も多くの神社で、祭礼に花火を揚げていますが、明治44年の法律改正で火薬製造に資格が必要となるまでは、自分たちの手で奉納花火を作っていました。この改正に伴い、同好者の一人に許可をとらせて花火を引続き打てるようにしたという例は各地にみられます。現在、花火メーカーとして看板をあげている業者の起源といえます。今は自分たちで花火を作るとを止めたものの、花火メーカーから購入して氏子の手で奉納花火を揚げる例が遠州地方などに根強く残っています。

わずかに残存していた花火自作の祭礼、千葉県富山町の平群天満宮の同好会が昨年秋に事故を起こし多くの死傷者を出したことは返す返すも残念なことでした。

花火の大小と打揚方法

花火には、小は2号(直径約6cm)から大は40号(直径約120cm)まで約20段階にわたって大小があります。この大きさは、実は玉の寸法ではなく、打ち揚げる筒の内径による呼称といった方がよいのです。

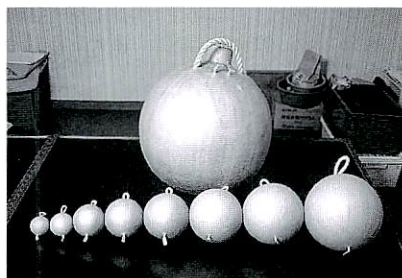
10号玉(尺玉)の直径は、30cmあるのではなく、実際は29cm強で、内径30cmの打揚筒に納まります。昔、尺貫法が使われていた頃には、何寸玉(一寸=3.3cm)と呼んでいたもので、現在は何号といえます。これは、何cm玉と呼んでは、その大きさを評価しにくいからです。

項目\号	3号	4号	5号	10号
直径/cm	8.5	11.5	14.2	29.0
重量/kg	0.2	0.5	1.3	8.5
容積/cm ³	614	1,520	2,863	24,389
火薬量/g	22	45	75	450
開発径/m	60	130	190	480
容積比	1	2.47	4.66	39.72

▲表1 3号、4号、5号、10号玉の比較

表1の容積をみてみましょう。3号:4号=1:2.47、4号:5号=1:1.88、5号:10号=1:8.51となり、1号の差は、約2倍、尺玉は5号の約9倍になるわけです。「1寸倍差」といって、1号違うと効果は2倍も異なることになります。

2~3号は小玉で、今ではそれを一発一発打つことは少なく、連発(スターマイン)に使われるようになりました。5号以上になりますと、細かな細工が可能で、日本の花火の特色を十分に発揮します。通常、7号以上を大玉といい、開発音もドーンと大きくなり、“絢爛”なものが望め、さらに15号以上は超大玉で



▲左から2.5~10号、中央は20号(©FPL)

玉の種類	保安距離	1級	2級	3級
7.5cm以下	ボカ物	100	40	25
	割物	100	65	40
9cm以下	ボカ物	100	65	40
	割物	140	100	60
12cm以下	ボカ物	110	75	45
	割物	150	110	65
15cm以下	ボカ物	150	130	100
	割物	210	180	130
18cm以下		220	190	130
24cm以下		250	210	130
30cm以下		290	240	150
45cm以下		300	250	150
60cm以下		400	300	200

▲表2 煙火保安距離基準(昭和63年改正)

スーンとお腹にこたえる“豪華”さを味わえます。見応えのある花火大会というには、尺玉(10号)の登場が求められ、5号玉も欠くような大会は寂しいものになりがちです。

鮎まつりの花火は7号玉まで

花火を打ち上げる時、周囲の状況、観客までの距離によって、打ち揚げる花火の大きさが決まります。会場が広く充分な距離がとれれば大きな玉が、狭ければ小さな玉しか揚げられません。これを保安距離といいます。火薬類取締法では「消費する煙火の種類および重量に応じて、通路、人の集合する場所、建物等に対して安全な距離を取ること」という規定があり、各都道府県でその距離を決めています。ですから県によって多少違いがありますが、表2は東京都のもので、東京の隅田川は、川幅が95mしかありませんので、下流の会場では2.5号(直径7.5cm)玉しか揚げることができません。厚木市の鮎まつりの花火大会では、相模川、中津川、小鮎川の合流地点を利用し、220mの距離がとれ、7号(直径21cm)玉まで打ち上げることができます。

昔の打ち揚げ筒は、太い木をくり抜いて、その上から丈夫な竹をきつく巻いて

作りました。一本作るにも手間がかかったはず。各地の神社には、このような筒が保管されており、祭礼になると、この筒に合せて玉を作り、奉納花火が打ち揚げられました。玉が先にあるのではなく、筒があってそれに合せて玉がつくられていたのです。ですから、明治時代の奉納花火の番付をみると、A神社は6寸、B神社は8寸、C神社は5寸と競演のサイズは一定していません。毎年9月10日に行われる新潟県片貝（小千谷市）では、明治24年に作られた3尺の筒の底板が浅原神社に残存していて、3尺玉が奉納されていたことを物語っています。

鉄製の筒が作られるようになったのは、大正末期からで、今ではステンレス製、紙製、さらにプラスチック製のものが使用されています。重すぎる、壊れやすいなどそれぞれに一長一短がありますが、万一筒の中で玉が破裂した時、筒の破片がどう飛び散るのかということが危険防止上重視されています。

花火はどのように打ち揚げられる？

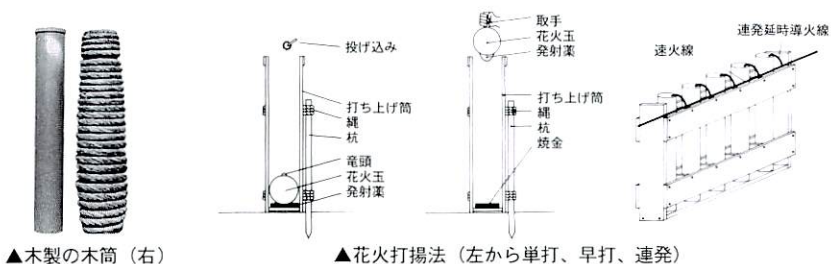
花火の打ち揚げには、単打、早打、連発と3つの方法があります。一玉ずつ打ち上げるのが**単打**で、まず筒に打揚用の火薬を入れ、玉を静かに納め、「投げ込み」という小さな火薬の塊に火をつけて落とすと打揚用火薬が爆燃し発生するガス圧で上昇、同時に導火線に点火して、上空において破弾薬に着火、花火が空に

開きます。

早打というのは、日本独特の打揚法です。鉄筒の底に炭火で真っ赤に焼いた鉄片（焼金）を入れ、その上に打揚火薬を取り付けた「早打玉」を落としますと、焼金で火薬に着火して玉が揚ります。次々と玉を落とすと、一本の筒で30玉くらいを連続的に打つことができ、たいへん能率的な方法です。しかし、打揚筒の脇で玉を落とすという作業なので、危険という声もでてきています。

連発とは、筒を沢山並べて一度に多くの花火を揚げる方式で、点火の方法はいろいろありますが、最近は筒から離れて電気点火をする方法が定着してきました。花火の業界は、「安全第一」、花火の事故をなくそうという方向に向かっています。花火大会が、短い時間、絶え間なく打ち揚げが行われる傾向となったことで、スターメイン（連発）が主役となりました。日本一、いや世界一の花火大会といわれる大阪富田林で開催されるPL芸術花火大会では、10号、7号が各100玉、5号が1,200玉をはじめとする合計7,800玉が最後に一斉に打ち揚げられています。

大小各種の花火を取り混ぜて、大玉は単打、4、5号玉は早打で、それに連発をまじえて起承転結を考えたバラエティー豊かなプログラムを構成したいと花火師は考えています。しかし、打揚場所の環境などによっていろいろな制約が伴う上、予算に縛られるので苦労しています。



▲木製の木筒（右）

▲花火打揚法（左から単打、早打、連発）

秘密主義から公開へ

秘伝書などの存在からも花火が「一子相伝」の技術であったことがうかがわれます。一方、全国各地で神社の氏子が奉納花火を上げていますが、この技術はどのようにして伝わったのでしょうか。

花火作りの秘伝書類は、今回の収蔵資料展にも展示されていますが、古いものには約200年も前の享和元年(1801)に書かれたものもあります。これらの秘伝書類には「極秘火術なので修業者の他は他見、他言を禁ず」などといった注意書が必ずといってよいほど記され、「一子相伝」、長子のみに伝えられました。

「唯心流」と記されている『花火秘伝書』ですが、大流星(火箭)の箇所をみますと、その配合は「エン」=焰硝=硝石(硝酸カリ)が10、「ユヲ」=硫黄が2、「松灰」=松の木炭粉が2となっています。原料は多くの場合、符丁で書かれており、この3種の他には鉄、「ショウ」=樟脳、光明丹などが散見されます。前述のように、炭はいろいろと使い分けられ、「キハ」=桐、「マハ」=松、「ツハ」=つつじ、「ヒハ」=檜、「タハ」=竹、「ヲハ」=麻柄、「サハ」=?など、符丁によって、それぞれの木の灰を使ったようです。同じ黒色火薬でも、鉄砲に使用する粒状にしたもの、樟脳を加えたものと使い分けてプレス(充填)することに秘訣があり、口伝のみで伝えていく内容もあったことが分ります。特に図示されている“バランス”は、3分の1の箇所しに重心があることを示しており、ロケット製造上のポイントとして興味深いものがあります。

これまでも私は、いくつかの秘伝書

に目を通していますが、特に荻野流のそれには現代に通じる妙案がみられます。打揚玉に鳩を入れて飛ばしたり、ロケットを何本も打出す「千本流星」などは、誠に秀逸なものです。

花火の流派は、この荻野流の他にも、愛知には稲留流、武田流、最明流があり、梅枝流(奈良)、櫟木流(仙台)なども知られています。

明治政府は、明治5年銃砲取締規則、さらに明治17年には火薬取締規則によって火薬製造を規制しました。火薬取締規則第一条に、「凡火薬劇発火薬 綿火薬、ナイトログリセリン、ダイナマイト、雷汞其他劇発質ノ物品ハ人民ニ於テ製造スルコトヲ禁ズ 但烟火マッチノ類ハ此限りニ在ラス」とあります。烟火作りは、江戸時代から全国に普遍化していて禁止し得なかった証左といえます。ちなみに、産業火薬類は、日清戦争後の明治32年8月、銃砲火薬類取締法によってはじめて民間で製造できるようになりました。それまでは、軍工廠で作ったものの払い下げと輸入に頼っていたのです。

技術を伝えた「万歳花火」

一子相伝の閉鎖的な社会であった江戸時代、日本花火の技術交流ないし伝播がどのような形で行われたのかを考える時、「万歳花火」という言葉がよく聞かれま



▲『花火秘伝書』 大流星の箇所

す。徳川幕府から火薬製造所として公認されていた岡崎は、煙火の技術では他を一步リードしていたと考えてよいでしょう。岡崎は、また三河万歳という正月を寿ぐ芸能を司どり、全国を回った万歳師の本拠地でもありました。彼らが、地方の花火好きと交流して新知識を伝えたという話は興味あるものです。長野の伊那地方に天竜川を遡って、三河の技術が伝えられたというのも、その一例と考えられます。地方の花火愛好家は、いわゆる信号用の狼煙から手筒（大筒）、さらに火箭の知識を得て、打ち揚げのノウハウを知ったということです。

また、鎖国をしていた江戸時代に新知識や硝石などの資材を輸入できるのは長崎、堺などの限られた貿易港でした。伊豆下田・河内村の諏訪神社には花火の秘伝書が伝わり、手筒の伝統が残っていますが、長崎で学んだ蘭学者が流刑されてもたらしたものとされています。

江戸で開業した鍵屋の初代弥兵衛は、大和（奈良）の篠原村の出身ですが、そこに花火の伝統はなく、江戸で花火が流行していると聞くと、まず堺に行って火薬の知識を得て、上京途中に岡崎に寄り、花火の修業をしたといえます。江戸に出るなり早速、大川の葦を使った玩具花火で大儲け。飛びっきりの才子でした。

三人の花火“伝導師”

降って明治大正時代、地方を廻って花火技術を伝授した功労者がいます。愛知の外山愛次郎、滋賀の広岡幸太郎、長野の田村仁三郎の各氏です。

外山愛次郎氏は岡崎の島清（稲垣）の一家ですが、依頼を受けると出張して新知識を教えたといわれ、中でも長野の藤原善九郎氏の招きで信州に行き講習会を開いた折、山口、武舎、市川の各氏、新潟の小泉氏などの花火師たちが参加した

といわれています。

甲賀流忍者の里・滋賀の湖畔地方は関ヶ原以来の伝統で、古来より花火の製造が盛んですが、優れた名手も輩出しました。その中でも、広岡幸太郎氏は当時の花火競技会で長野の青木儀作氏と常に優勝を競う名人といわれましたが、晩年地方を廻り多くの花火工場に逗留して割物の技術を教えました。その配合は、やや鋭敏で本人は何回か火傷を負ったといえます。戦後、滋賀に花火の伝統が消えてしまったことは寂しい限りです。わずかに毎年5月4日、近江八幡市上田の篠田神社で奉納される和火の仕掛花火に昔を偲ぶことができるだけになっています。

長野の田村仁三郎氏は、前述の青木氏、広岡氏、そして静岡の池谷氏と並び、競技会の入賞常連組でしたが、たまたま免許取得のチャンスを逸したため、地方を巡回して技術伝授の旅を重ねました。その結果、多くの弟子が育ち、全国的に花火がレベルアップする素因となりました。

これら三人の存在が、秘守主義の風習を打破する一つのエポックとなったといえましょう。

伝統文化ではない？花火技術

さらに、花火師が自らの研究成果を公開しなければならなくなったのは、前述したように危険性の高い火薬・塩剣を追放する安全化運動によります。この運動の結果、全国の業者が“脱塩剣”を果たすとともに技術レベルも平均化しました。

花火の技術は、伝統文化の一つと考えられます。日本煙火協会では、他の伝統工芸と同じように国の認定を受けたいと申請しましたが拒否されました。その理由は、花火が昔と同じ素材、不変の技法で製造されていないからでした。確かに、花火は日進月歩の世界といえます。

世界の花火事情

花火は祝意を示す万国共通の歓喜の声です。あのベルリンの壁が崩れた時、早速花火が揚げられました。50年前、第二次世界大戦が日本の敗戦により終結した時、モスクワの空には一週間、平和を告げる花火が盛大に咲き続けたということです。

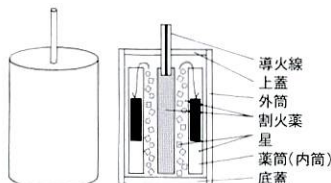
花火を好まない民族があるのでしょうか。中国では500年前、すでに五彩の花火が作られていたといえます。練金術と不老長寿を求めた練丹術により、いろいろな調合を繰返す試行錯誤の中から、爆発する物質に出会い、美しい色彩を見つけ出した—それが火薬の発明であり、五彩の発見であったわけです。火薬はまず兵器として使われ、12世紀にはモンゴルの制覇をもたらしました。

やがて、火薬はローマに渡り貴族、王族たちの遊び物として花火が生まれますが、当初は宮殿の中で行われる催し物の人気役を務めました。やがて、ビクトリア王朝、ロシアの王宮でも持て囃され、特にプロシアでは皇帝自身が花火作りに熱中したといえます。

やがてヨーロッパからアメリカにも輸出されましたが、お祭り好きな国民性からアメリカは世界一の花火消費国となり、現在も毎年1,500万ドル以上の花火を中国、台湾、イタリア、スペイン、フランス、メキシコ、ブラジル、そして日本から輸入しています。アメリカを中心としてその花火供給国などの花火事情をみていきましょう。

アメリカ

アメリカでは50州ある州のうち、玩具花火を含めて一切を禁止している州が16州あり、正月と独立祭だけ販売できるのが8州、独立祭の期間だけ販売できるのが7州、特定期間、特定地域だけ許可し



▲アメリカの花火玉

ているのが2州、年間を通じて販売が可能なのは残りの17州のみです。つまり、3分の1の州は禁止、3分の1の州で制限され、一年を通じて販売許可の出ている州でも一部の品種は禁止となっています。ですから、7月4日の独立祭を中心とした期間だけで90%の花火が消費されているといつてよいようです。

その7月4日の独立祭には、全国各都市で祝賀花火が打ち揚げられ、規則のやかましい州でも越境した花火が幅をきかせます。花火打ち揚げに当たって、地域のFM局が音楽を担当し、それに合わせる方式が流行しています。また、トレーラーに予め花火の筒をセットし現場に乗り入れ、直ちに打ち揚げるという方式も定着しようとしています。

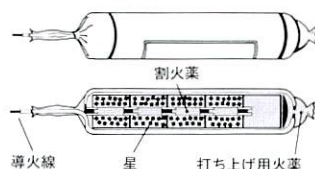
しかし、アメリカ国内での生産は年々減少しており、玩具花火は中国産が過半を占めています。日本からの輸入は、円高の影響も加わって年々減少し、中国、台湾からその代替品が供給されています。

最近では、デイズニランドをはじめ各地のテーマパークでの花火打ち揚げ、各種イベントの効果に使用され、需要も増えてきています。世界一の花火消費国として、今後も輸入を増やしていくことでしょう。

中国

“火薬”の創始国は、いまや世界の子供用花火の80%を独占、供給する花火王国となっています。日本でも、量的には2/3が、また金額的には1/2が中国産です。いつでも無限に従事者を増やすことができ、人件費にかかるコストも押さえることができるという条件は、独占にますます拍車をかけることでしょう。

打ち揚げ花火もすでに、日本の業者10社ほどが大陸に合併会社を作って技術を提供し、その生産性を充実させてきてい



▲イタリア式の長玉

ます。打ち揚げ花火の輸出国・日本が輸入国となる日もそう遠いことではないでしょう。しかし、中国の花火工場は、品質管理体制の不備などの欠陥が指摘されています。アメリカの業界は現地に検査機構を設置、改善策を図る一方、中国側でも組織的に対応しているので近い将来、問題は解決されるでしょう。

中国の国内消費は、冠婚葬祭すべてにおいて爆竹に明け、爆竹にくれる民族ですから、少ないわけがありません。しかし、春節（旧正月）の死傷事故多発から規制が始まり、特に北京、上海の中心地では、使用禁止が昨春から本格化しています。解決策の一つとして、爆竹音の録音されたカセットテープが売られているというニュースも伝えられています。

イタリア

欧州において最も早く花火を作ったのがイタリアです。その歴史は長く、また国内の花火消費も多いので大小さまざまなメーカーが活躍しています。

アメリカの打ち揚げ業者には、イタリア系移民が多いため、アメリカでも何段にも重ねられたイタリア式の長玉が打ち揚げられています。

スペイン

世界の花火を取り扱うアメリカの業者によれば、各国の花火の中で最も活発勇壮なのがスペインのものだといいます。多少の危険もいとわないお国柄です。バ

ルセロナオリンピックの閉会式における花火の活躍にも凄じいものがありました。

バレサンという町では、毎年火祭りがあり、紙製の人形に仕掛けられた花火で、町中が火の海になる凄絶さを世界一と驚嘆した随筆を読んだことがあります。スペインの花火は音も高く、喧噪です。

台湾

喧噪といえば、台湾の春節（旧正月）も花火で酔います。特に、台南省の塩水という町では、光緒11年(1886)から続く奇祭が見られます。旧正月の14、15日に「船形烽炮」と呼ばれる仕掛台200余台が路の真中で次々と点火され、15,000余のロケット花火が水平に打出され、ヘルメットで武装した見物人が逃げまどいます。それが二晩も続き、20万人の観衆が全島から集ってきます。最近では台南市郊外の鹿耳門でも聖母廟の行事として花火の打ち揚げとともに塩水同様ロケット花火が飛び交います。無病息災を願って火をかぶらねばならないと、怪我を覚悟で住民が参加する行事となっています。

台湾では、正規の許可をとっている工場は17社ですが、いわゆる地下工場はその十倍はあるといわれ、住民が花火を愛好するのを放任していた頃の日本と似た状況のようです。

また、台湾では現在も双十節の花火大会は聯勤部隊（軍工廠）の任務であり、軍隊で花火を作るといことも行われていました。しかし、現在では民間から花火を調達しているといわれています。

フランス

フランスの花火師は演出に力をいれています。花火ショーとして、音楽会、舞踏会のラストにBGMや噴水、レーザー光線などとともに10分程度のプログラムが組まれます。エッフェル塔に仕掛ける

花火も、花火中心の花火大会ではなく、花火は一つの素材に過ぎません。時には、人間が手足に花火をつけてパフォーマンスを行うこともあり、花火そのものに芸術性を追求する日本の花火とは一味違ったものが感じられます。

ドイツ

中国、台湾をはじめとして世界中の華僑圏では正月を花火で祝う習慣がありますが、ドイツでも正月は花火で祝うものとされています。ただし、ドイツでは光より音を轟かすことに重点がおかれており、大晦日には、音物やスパクラが街中に溢れるといいます。

1979年から4回秋田県大曲市がボン、デュッセルドルフ、ベルリンで日本選抜大曲花火引越大会を開催、本物の芸術花火を披露し、100万人近い市民に「生まれて初めて見る感動」を与えました。日本の花火の素晴らしさを世界の人々はまだまだ知らないといえましょう。

メキシコ

世界一の花火消費国アメリカと隣接しているメキシコの花火は、手続きが煩雑な危険物の船舶輸送を行わずに済むこともあり、歓迎されているようです。メキシコの花火は、ブラジルとともに米国への供給が年々増加しています。

人件費などコストの点でも有利な上、国民性にも適した仕事なのでしょうが、アメリカの花火工場の従業員にもメキシコ系が増えてきています。

タイ

12月5日のタイ国王の誕生日には、毎年主都バンコックで陸空海の三軍によって仕掛花火が作られ奉祝する行事が行われます。日本からも3回程献上花火を打ち揚げに行きました。軍隊で花火を作る

ことは一見奇異に感じられますが、台湾等でも行われており、日本でも昭和初年まで陸軍造兵廠が靖国神社大祭の花火を実施していました。日本からの献上を契機に今では合併の花火会社が生まれましたが、三軍提供の手のこんだ仕掛けは今でも軍人の仕事です。

なお、チェンマイ地方をはじめ各地で花火は作られ、年一回のロケットコンクールも開かれています。

フィリピン

大晦日の花火で毎年死傷者がでる国の大関はフィリピンです。1989年には、死者22名、負傷者1,500余名を出しました。円筒型の爆竹ばかりでなく、ピンポン玉程の大きさのある“雷球”をぶつけ合うというのですから無理もないようです。フィリピンでは、マルコス時代の1966年に花火の製造が禁止されました。その後、アキノ前大統領の時代に改善がはかれたといわれますが現状は不明です。

おわりに

奥深い花火の技術から世界の花火事情までみてきました。「日本の花火技術は優れている」と日本の花火師は自負しており、海外に打ち揚げにいく度にその感を深めています。特に、この頃は友好都市の交流イベントの目玉として各地の花火師が海外でも活躍しています。

花火は老若男女、貧富の差なく誰でもが享受できる芸術です。しかし、まだまだ本物の芸術花火があることを知らない人が外国、いや日本の中にも沢山おられるのではないのでしょうか。私ども花火師は皆、一人でも多くの方に感動を与えられたらと願っています。

Ⅲ 花火をつくる

—厚木の花火職人—

夏の夜空を彩る花火は、どのようにしてできるのでしょうか？どんな職人さんが作っているのでしょうか？

厚木市内には、和田吉二さんという花火職人が住んでいます。ここでは、花火の製造工程、花火作りの道具とともに、和田さんが、どのようにして技術を身につけたのか、どうやって一人前になっていったのか、そして“花火の技術”は現在どうなっているのかなどのお話をうかがいました。

普段、あまり語られることのない花火職人の生活史についてみてみましょう。

厚木の花火職人 和田吉二

厚木で作られた花火を、厚木でみることができるのは嬉しいことです。その花火を作っている和田吉二さんに、花火作りの技術から、鮎まつりの思い出、そして今後の抱負について語ってもらいました。

(＊の写真は、厚木市広報課提供)

厚木の花火職人 和田吉二さんは、昭和14年に厚木市棚沢で花火職人の仕事をしていた和田岩吉さんの次男として生まれました。

棚沢の位置する厚木市睦合地区は、中津川と荻野川に挟まれた地域で、和田家は鳶尾山の東側の麓にあり、住所は厚木市棚沢となっています。

このあたりも以前は、長閑な田園地帯でしたが、今は神奈川工科大学やりコーなどの大学、工場が立ち並ぶようになり、住宅も多くなってきました。和田花火店(現・ファイアート神奈川)からも10分ほど歩いて坂を上っていくと、厚木市で最初の公団住宅である鳶尾団地となります。

棚沢地区と花火の伝統

明治以前から、棚沢やその周辺では、祭礼のときなどに花火が打ち揚げられ、その技術が伝承されていました。このようなときには、付近の村からも道楽で花火を作っている人たちが大勢、打ち揚げにきたといえます。

棚沢の鎮守・神明社(皇大神社)の祭礼には、下川入あたりの人が花火を持参し、打ち揚げることもよくみられたということです。その際、「今年の下川入は、いい花火ができたな」「どこそこのはよくない」などと批評をし合い、同好者の間には技術的な交流もありました。

明治44年の法律改正で、火薬を扱うには免許が必要になりました。そこで、吉二さんの祖父にあたる和田忠次郎さんは、明治40年6月19日付けで願いを出し、7月19日付けで神奈川県知事から煙火製造業の許可がおりました。

祖父、そしてその時代について、吉二さんは次のように語っています。

「祖父の忠次郎は、鳶尾山麓の月尾根で農業をしていましたが分家して棚沢に住むようになりました。煙火製造の許可

があるとはいえ、農業が本業で、花火作りは副業というよりも道楽に近いものであったらしいのです。

当時、祖父の兄や叔父にあたる人も月尾根で花火を作っていたというし、他にも花火作りをする人が何人もいた。この人たちはみな職人というよりも農業の合間に楽しみでやっていたのです。」

その後、昭和11年に吉二さんの父・岩吉さんが二代目を継ぎます。しかし、和田家の生業はまだ農業が主であり、花火作りはあくまで副業でした。

「父の場合は二代目といいながら、戦時中という時勢でもあり、花火の需要は少なく、農業を中心とした生活でした。先代から伝えられた花火の仕事でしたが、当時は閉鎖的で情報も少なく、そんな中で先代は、従来のものより少しでも良い花火を作ろうとしていました」と、吉二さんは先代の時代を振り返ります。

和田花火店に限らず、地方の花火屋が、花火作りを専門にできるようになったのは、生活が豊かになり、祭礼以外にも運動会、各種イベントなどで花火の需要がでてくる、高度成長期以降のことです。

花火の技術を修得する

「先代の時代には、花火の製造量も少



▲和田吉二さん

なく、家族的、小規模な仕事でした。従って、そこには本職の職人としての修業といったものはなく、家族的な“見よう見真似”の仕事の覚え方しかなかった」と述べるように、吉二さんは弟子入りして修業を積むという、普通の職人がたどる成長過程を経なかったようです。

ただし、「子供の頃は、玉貼り、玉貼りに使用する紙を集めたり、その切断、糊付けなどをやらされてました。火薬を直接使わない補助的な仕事の花火屋には結構あって、これらが子供の頃の仕事でした」というように、幼い頃から花火は、いつも身近に存在していたのです。

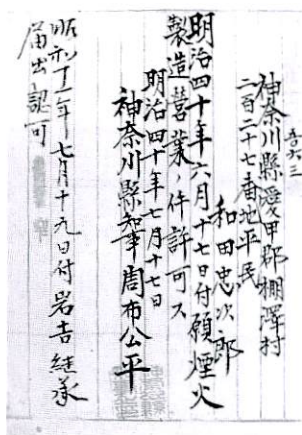
いわゆる“門前の小僧”方式で技術を修得していった吉二さんですが、高校に入学した頃から先代のアドバイスを受け、花火の試作を始めました。薬品の種類、配合などは、すでに子供の頃から見て知ってはいましたが、高校に入るまで触ることは許されなかったといいます。

その後、吉二さんは試作を重ねては、各地の花火コンクールに先代の名前で応募していました。そして、まだ高校在学中の昭和33年7月には、両国の花火大会で優秀賞を得たこともありました。

「この時の玉名までは覚えていないが、入賞したのは昼花火の部でした。昼花火は、音、煙、光が中心でボカ玉の要素が多くなります。私のは、煙を少なくして、光を強くといったことをポイントにしました。それで印象を強めたのでしょう。

夜の部は、本割で新物、芯入カム口、千輪小割などが出品されていました。もう古くからやられている先輩方がたくさんいましたから、とても高校生が入賞できるようなものではありませんでした」と、吉二さんはその作品、入賞の戦略について語ってくれました。

では、花火職人として一人前の条件とはどのようなことでしょうか。



▲二代・岩吉さんの許可証

「基本的には他の一般の仕事と同じ。どんな過程の仕事をしていても、常に仕上げの状態を考えて仕事ができるということ。つまり、火薬をいじっていても、玉込めをしていても、その花火が空でパツと開発したときの状況が想定でき、それを前提に仕事ができるということ。やはり、最低でも10年はかかるのではないか。

また、それに加えて花火師には、危険物取扱免許などの社会的に課せられた資格という条件もある。ただし、これはスタートライン。運転免許にだってペーパードライバーがいるように、どんな資格も同じこと」といいます。

この資格には、火薬取締法によって花火を作るための「製作」、打ち揚げるための「取り扱い」、それぞれの資格があります。つまり、製造と打ち揚げは、別々の作業であり、両方の資格を持っていないといけないのです。吉二さんは、「一人で作って、打ち揚げることができ、はじめて“花火師”とよばれる」のだといえます。

三代目の花火師となる

その後、三代目を継ぐはずだった長兄が作業中の爆発事故で亡くなったため、

▲配合も文字化されオープンに

吉二さんが家業を継ぐことになりました。

「私が三代目の花火職人になったのは、昭和40年頃で、和火から移り変ってきた洋火の時代が本格化し、硝酸カリから塩素酸カリへ、そしてより安全な過塩酸カリウムへの移行した時期でした。

昔の花火は、赤爆といって運動会で用意ドンという、あれを使っていたんです。これは非常に敏感な配合をした。事故も多く、アルミニウムや塩酸カリウムなどに変えていった時代でもありました。だから、教わったことだけではなく、すべて自分で試してみなければならぬわけです。従って、先代から受け継いだ部分よりも、むしろ自身で開発してきた部分の方が多いと自負しています」と、吉二さんはいいます。

また、新しい花火作りに関して、「花火職人は、一年を通じて花火作りをしています。だから年中、花火のデザイン、その企画を考えています。試案によって簡単な確認はできますが、本当の確認は夏の本番でしかできません。

結果として、おおよそ99%の効果が得られますが、中には120%のもの、観客の受けが非常によいものがあるのです。そういったものと、翌年はそれを多めに作っていいこうということになる」

のだと、吉二さんはいいます。

花火製造の企画に関するポリシーについて、「花火作りにおいて、職人が喰る出来のものと、観客に受けるものとは違うものです。例えば、花火は真ん丸に開発しなければならないとされていますが、実際、場合によっては多少楕円の方が受けることもあります。確かに、本割にはそのような基準があります。しかし、花火職人が目指すものは観客に受けるものであるべきです」と、吉二さんは考えています。

非常に大きく変わった花火の世界ですが、それは材料のことだけではありません。技術革新によって、連発物などが可能となり、花火大会がとてもショーアップされたものとなってきました。

「例えば、最初に赤や緑の花火を打ち揚げるとします。次にパパパバと音を主体にし、平面体と立体を相互に交えるために、大きく開いたしだれ柳の先の細い部分に翼を刻んだものを入れたこともある」と、吉二さんはその細工を語ってくれました。

イベントによっては、「テープカットと同時に打ち揚げをして欲しい」など、花火の打ち揚げ時間を秒刻みで要求されることもあるといいます。さらに、花火の打ち揚げが行事の目玉となることも多くなってきており、イベントの盛り上げ方、音楽との合せ方などについても知識が要求されます。

つまり、よい花火を打ち揚げればよいという花火師から、“演出家”としての花火師が期待されるようになってきたというわけです。

また、花火大会が大規模になるに従って、「大会を主催者側の依頼通りに開催できるような、企画力、マネジメント力、そして大工、彫職など多くの職種の人を、大人数必要とするので、それらの人を自

分の手足のように上手に使う能力が必要」だと、吉二さんは述べています。

助け合う仲間から競争者へ

現在、花火職人、花火会社などを全国的に束ねているのが日本煙火協会です。その神奈川支部には、12事業所が会員になっています。神奈川県内で花火の製造まで行なっているところは、愛川町、相模原市、厚木市、津久井郡の4ヶ所だけです。「愛川町中津の山田花火店、相模原市田名の飯村製作所(旧・飯村煙火工場)、そしてうちは昔から、助け合って仕事をしてきた。山田さんのところは打ち揚げが中心、飯村さんは仕掛けの文字ものと、それぞれ得意分野があるが、本当に昔から家族的に助け合ってきた」といいます。

このように、家族的な関係の同業者たちですが、「第一回目から関わっている駄まつりに、途中一年だけ打ち揚げができなかった年がありました。入札で負けたのですが、今考えてみるとその当時は、花火屋が家業から企業への転換期を迎えていたのだと思います。

つまり、近辺の2、3の業者の協業体制をとってみても“応援をし合う”という意識から、仕事を請け負った会社の“下請”という契約関係に変わっていった



▲旧工場跡に建つ兄の供養を兼ねた碑

のだと思います。当然、入札などでも他の花火屋との競争になり、商取引という感覚も芽生えてきました」と、吉二さんは当時を振り返ります。

花火の事業所は全国で、450くらいあり、そのうちの200くらいが打ち揚げ花火を製造しています。神奈川県内の業者は、和田花火店と先の2軒を除くと、製造よりも販売が主となっており、販売のみの業者が4社、そして玩具花火が1社という内訳になっています。

現在、神奈川県内では30数ヶ所で花火大会が開催されていますが、和田花火店はそのうちの約半分の大会で、花火を打ち揚げています。

職人の派閥と技術公開

現在の花火業界には、日本煙火協会の他に、昔のような流派といったものはないが派閥のようなものはあるといいます。

吉二さんは、その流派について、「以前の花火職人は弟子入りして、その技術を修得していったため、何かあると同じ師匠筋の系統でまとまります。現在、技術的にはほとんどオープンとなったこの業界ですが、“あの人は丸玉屋系統だ”などと師匠筋の系統で括られることが多くあるといいます。私は、祖父、父から技術を修得していますから、そういった系統には属していません」と述べています。

吉二さんはこのような流派、秘伝といったものについて大変批判的です。その理由について、「業界に入ったとき、職人の世界独特の閉鎖的な感じがした。第一にそれが嫌な気分だった。

情報化時代にこうした秘伝、系統を守ることは無意味。加えて、技術の変革期において情報が行き届かないことは危険につながる。花火は危険物であり、事故が起きると業界全体のマイナスイメージとなる。何より、花火の世界は、見たり、

火薬の量を調整したりすることで同じものを作ることができる世界でもある。ならば、オープンにして技術を公開した方が業界全体の進歩が早い。

本当に必要であれば、特許をとってパテント料をとれば済むことだ。火薬の配合などは著作権と同様と考える人もあるかもしれないが、花火の世界は流行のサイクルが短いので、個人的には必要ないものと思っている」と、情報の公開に関して安全面での効果を強調しています。

しかし、「業界内にはまだ、秘伝の類を後生大事にしているものがいて、徹底していないのが現状」だといいます。

花火師の信仰

花火は、たとえどんなに完璧なものを作ったとしても、最終的には“天候”に左右されてしまうものです。吉二さんは、「鮎まつりなどの大きな大会の前には、現場を見回りながらつぶやきます。空、風、雲の神様、川の神様、大山がみえれば大山の神様に、無事花火大会が終了しますようにと祈るんです」といいます。こうすると気持ちが落ち着き、周囲がよくみえるようになるのだといいます。

また、昔と較べて安全になったとはいえ、花火製造や打ち揚げには、現在でも危険が伴うものであることに変わりはありません。そのために取り扱いなどに、法の規制などがあるわけです。

花火を打ち上げる前に、御神酒をあげて安全を祈るという花火師もいると思いますが、吉二さんのところでは特に何もしていません。

吉二さんは、実兄を事故で亡くしているためか、安全に関しては信仰や精神的な面よりも、むしろ実務的な面で非常に神経を使っているのです。

「私のところでは“安全マニュアル”、“配合等の文字化”など、安全性、作業



▲変芯変化菊（'94年鮎まつり）*

性を高めるための努力をしている。これらは、日々、そして年々改訂していくつもり」だといいます。

「兄の事故は、情報化云々というよりも、むしろ初歩的な調査を間違えたためのもの。まだ18歳だった兄は、赤爆製造中に亡くなった。家族的な工場だったので、そのような事故も起こってしまったのです。

その後、工場を拡張するとき、初代が工場として使っていた敷地、ここは兄が亡くなった場所でもあるので、供養の意味も込めて、碑を建てることにしました。

碑文は何にしようか迷いましたが“大地を尊び、老人を敬う”という好きな文句にした」というように、吉二さんは、精神的な面も決して無視しているわけではありません。

思い出の花火、そして鮎まつり

吉二さんの、30数年間にわたる花火人生の中で、思い出に残る花火というのはあったのでしょうか。「特に記憶している花火というのはありません。ただ、葉山町で戦後30年を記念して行われた昭和天皇の天覧花火を打ち上げることができた時は、その巡り合わせに感謝しました。

葉山町では菜島というところで打ち揚

げを行うのですが、立地条件、陛下が御覧になる二階の居間からの角度、観客の位置、そして打ち揚げ場所の水深などにも特に気を配った予備調査をしました。翌朝、「久しぶりの花火が楽しかった」という陛下の言葉を新聞に見つけたときはやっぱり嬉しかったです」と、吉二さんは古いスクラップブックをめくりながら語ってくれました。

最後に、先代が亡くなった昭和40年から仕切っている厚木鮎まつりの花火大会ですが、吉二さんにその思い出などについて語ってもらいました。

「厚木では、鮎まつりの他にも昭和30年代には天王さん（厚木神社）でよく広告花火を打ち揚げたことが記憶に残っています。また、相模川に燈籠流しをしながら、盆の供養に花火を打ち揚げたこともありました」と、まだ若かった吉二さんは先代とともに、花火の打ち揚げに従事しました。

初期の頃の鮎まつりについては、「相模川に架かるジョウ橋からロープで道具を河原に下ろしたこともありました。その頃は、ジョウ橋と小田急の鉄橋の間で打ち揚げをやっていました。当時は、現在と街の様子も違い保安距離も保てたので、少し上流の方では尺玉を揚げたこともありました」といいます。その頃は、相模川でも尺玉がみられたのです。

鮎まつりで見られる花火についても、時代的な変遷があり、仕掛け花火が全盛の時代もあったといえます。その頃のことを吉二さんは、「仕掛け花火を横に数100mも伸ばしたこともありました。このような大掛かりな仕掛けは、現在ではもうみることができません。今日、主体となっているのはスターマインで、協賛企業の仕掛け花火でもスターマインの方が主となります。昔は、現在のような連発がなく、大きな仕掛けが観客の注目を集

めたんです」と語っています。

他にも、大山の風景を型取った背景にスポンサーの文字を数100mにわたって書いた仕掛けを行ったこともあるといえます。

昨年、鮎まつりの花火大会では、おおむね6,500発の花火玉が打ち揚げられました。これは、スターマインに使う小玉から、7号玉、仕掛けなどに使用する花火玉すべてを含めた数です。

「花火大会の規模は、何で決まるのか不明確ですが、スターマインの打ち揚げが1時間という大会が多い中で、2時間揚げ続けるという鮎まつりは大きい方だといえるでしょう」と、吉二さんは胸を張ります。また、「鮎まつりでは、音楽花火などの新しい試みがあり、“宇宙の花園”などといったイメージ的な玉名をつけた花火を揚げたことがあります」といいます。

「私の花火人生において、鮎まつりは、仕事上の一つの目標でもあります。県内でも各地で仕事をしていますが、鮎まつりは地元でもあり、またいろいろな思い出もある特別なものです。

鮎まつりでは、花火を単なる商品の取引引きということではなく、どういった企画で、どのように市民に喜んでもらうのか、そうした点で力が入ります。これから新趣向を取り入れ、よりショーアップしたものにしていきたいと思います」と、その抱負を込め、鮎まつりについて熱っぽく語る吉二さんです。

＊「花火の製造工程」は、山崎祐子氏による「神奈川県諸職関係民俗文化財調査票」作成のためのノートをベースに、補充調査を加えたものです。ノートの使用を快諾された山崎氏に御礼申し上げます。

花火の製造工程

花火作りは、夏、秋のイベントシーズンが終わるとすぐにはじまり、翌春までには花火玉の形となる。火薬配合、造粒、玉込めなど興味深い花火の製造工程をみてみましょう。

(**以外の写真は、厚木市教育研究所提供)

火 薬 花火作りは、打ち揚げに使う黒色火薬（硝酸カリウム、イオウ、炭粉）と色づけの薬品を購入することからはじまる。花火の薬品を専門に扱う薬品屋から買っているが、これらは購入時には薬品であり、配合を施して後にはじめて火薬となる。

従って、購入した薬品は、火薬庫ではなく、薬品庫の方に保存される。

配 合 作る花火の種類によって、さまざまな薬品の粉末をはかりで計り、混ぜ合わせる。そのため、配合作業を行う建物の内部には、天井から何種類ものふるいが下がり、棚には各種のボールが置かれている。

ふるいは、目の大きさによって、硝酸カリウム用、木炭用などさまざまに分れており、適宜使い分けている。



▲薬品の配合

かつて、粉末でない薬品はヤゲン（薬研）を使って粉末にしていたが、これは現在では使われていない。

造 粒 配合した火薬に水とのかきを加えて小さな固まりにする。この固まりを「星」とよぶ。配合には混ぜ合わせるための専用の機械（ミキサー）が使用されている。

5寸玉（直径14.5cm）用の星には、1cm³程度のものを使うが、これを星にする

までには約一ヶ月かかる。

ミキサーを導入する以前には、配合した火薬をすくうおたま（料理用のもの）、火薬を早く混ぜるための泡立て器を使用していた。ただし、これらは家庭用のものより多少は大きめのものだった。また、それよりも前には、木のたらいに火薬、そして糊と水を入れ、カラカラと揺すって混ぜていた。このたらいも、花火作り専用のものではなく、普段の生活用のものを使用していた。造粒作業には、これらの他にも、ふるい、ボール、はけ、ポリバケツ、ホーローバケツ、スプレー、洗面器などが使われている。

また、星の造粒には「寒を通す」といって、寒の水がよいとされ、寒の間に作られていた。「寒を通すのがよい」ということは経験的なことだけれども、実際に真冬の水は不純物が少ないのです。そして、この時期に配合するのがよいといわれているのは空気が乾燥しているからです。花火の仕事は水、糊などを使いますが、最終的には、含まれている水分を飛ばさなければならないのです。それには、この乾燥した時期が最も適しているとい



▲造粒にはミキサーを使用

うことです」と和田さんは説明している。

玉込め このようにしてできた星を、椀の形をしたタマガワ（玉皮）という「型」

の中に入れる。星を入れる際には、写真のようにナベフタのような木製の板を使ってすり切りにする。そして、“たたき棒”と呼ぶ棒状の道具で軽く叩き、タマガワに星を隙間のないようにきっちりと詰める。この“たたき棒”は、他にも卓球のラケット状のものなどがあり、職人によってさまざまな工夫がみられる。

現在、玉皮はプレス加工で作るため、外注されている。しかし、以前は木球に



▲“星”をつめる玉込め作業**

新聞紙を貼り重ねて作り、それを二つに割ったものを使っていた。

玉貼り “玉皮”という紙製の型に入れた玉は半分の球になっているから、これを二つ合わせて一つの花火玉にする。星と星の仕切りには、仕切紙を使う。

そして、二つを合わせた継ぎ目の上から、紙を貼って球状にする。この作業とともに、導火線をつける。

花火玉に紙を貼る際には、うどん粉を煮た糊を使っていた。その後、しだいに「ショウフ糊」と呼ばれる米の粉を煮た糊が使われるようになる。うどん粉を煮た糊と比べると、ショウフ糊の方が粘着力、強度があるからだ。

花火玉に貼る紙には、以前は糊の袋、農業用の肥料袋、新聞紙などの廃物を利用していた。今は、より薄くて強い専用

の紙を使っている。そのため、前は「寸八」といって花火玉の直径1寸あたり4枚の紙を貼っていたのが、寸あたり2.5枚くらいに減らしても大丈夫になった。

専用の紙は、ローラーで糊付けをして、折り返し、一日寝かす。余計な水分を飛ばすためだ。それから、カッターで帯状にカットするが、紙は花火玉の大きさに合せた長さになっている。



▲花火玉を球にする玉貼り

玉貼りの作業には、はけ、糊入れの壺、包丁、ものさし、目通しなどを使用する。

花火玉を干す こうしてできた花火玉は、干して仕上げれば、完成となる。花火玉を干すことを“日乾作業”という。

でき上がった花火玉は、専用の倉庫に納められる。和田花火店には、初代の頃より使っている倉庫がある。以前は、ここにでき上がった花火玉も収納していたが、現在は周囲に民家が建ち危険となったために鳶尾山に専用の倉庫を作り、そちらに収納している。

工場内にある数箇所の倉庫は、火薬にする前の薬品、発火、爆発の危険性のないものを収納しており、花火玉が完成する季節は空となる。また、敷地内には、打ち上げ用の筒、仕掛けの枠などを納めるための倉庫もある。

展示資料一覧

●花火コレクション

No.	絵師(作者)	タイトル	形状・寸法	年代	版元、彫師など
1	菊川英山	江戸両国 寿々みの図	大判錦絵三枚続	1811~1814 (文化8~11年)	川口屋版
2	喜多川歌麿Ⅱ	浮絵 江戸大川夕納涼之図	大判錦絵一枚	1812(文化9年)	版元馬食町武丁目 山口屋藤兵衛
3	歌川国丸	両国納涼図	大判錦絵三枚続	1815~1829 (文化12~文政12年)	馬食町二丁目 西村屋與八版(永寿堂)
4	歌川国満Ⅰ	新板浮絵 両国涼之図	大判錦絵一枚	1801~1830 (享和6~文政12年)	日本橋坂本町 川口宇兵衛版 (大栄堂)
5	歌川豊国Ⅰ	無題(両国橋花火之図)	大判錦絵五枚続	1789~1804 (寛政末、享和、文化)	伊勢屋惣右近衛門版 中橋山田庄次郎 (錦寿堂)
6	歌川広重Ⅰ	両国納涼大花火	大判錦絵三枚続	1847~1852 (弘化4~嘉永5年)	葛屋十兵衛版
7	歌川豊国Ⅲ	秀の山雷五郎、荒馬吉五郎、小柳常吉	大判錦絵六枚続	1843~1847(天保14 ~弘化4年)	喜雀(鶴)堂 (佐野喜)版
8	歌川広重Ⅰ	江戸名所 両国橋納涼	大判錦絵一枚	1832~1834 (天保3~5年)	—
9	歌川豊国Ⅲ	夕寿々美	大判錦絵三枚続	1847~1852(弘化4 ~嘉永5年)	—
10	歌川広重Ⅰ	江戸名所 両国花火	大判錦絵一枚	1847~1852(弘化4 ~嘉永5年)	—
11	歌川国郷	東都名所 両国繁栄河開図	大判錦絵三枚続	1853(嘉永6年)	両国広小路板元 釜屋喜兵衛
12	歌川(一寿斎)芳員	東都名所之内 両国橋納涼之図	大判錦絵一枚	1854 (安政1年)11月	佐野喜版(喜鶴堂)
13	歌川広重Ⅰ	東都名所 両国夕涼	大判錦絵三枚続	1854 (安政1年)5月	—
14	歌川国郷	東都名所 両国夕涼の図	大判錦絵三枚続	1856 (安政3年)2月	佐野喜版(喜鶴堂)
15	歌川豊国Ⅲ	東都名所四季之内 両国夜陰光景	大判錦絵三枚続	1853(嘉永6年)	ゑびす屋版(錦昇堂)
16	歌川広重Ⅰ	名所江戸百景 両国花火	大判錦絵一枚	1858(安政5年)	下谷魚榮版 (魚屋栄吉、小田屋)
17	歌川豊国Ⅲ	東都両国橋 川開繁栄図	大判錦絵三枚続	1858 (安政5年)3月	てりふり町 ゑびす屋庄七版 藤慶版(松栄堂)
18	歌川房種	東都両国の夕涼	大判錦絵三枚続	1862 (文久2年)5月	深影長
19	歌川広重Ⅱ	両国川開之図	大判錦絵三枚続	1862 (文久2年)1月	—
20	歌川豊国Ⅲ 歌川広重Ⅱ	江戸自慢三十六興 両こく大花火	大判錦絵一枚	1864(元治1年)	平のや版(愛錦堂)
21	歌川豊国Ⅰ	浮絵 東都両国橋之図	大判錦絵一枚	不詳	影多七 芝明神前若狭屋與市版 (若林堂)
22	溪斎英泉	新版浮絵江戸両国橋納涼之図	大判錦絵一枚	不詳	日本橋通式丁目総州屋 興兵衛版(総興)
23	歌川国貞(豊国Ⅲ)	浮世名異女図会 江戸町芸者 両国夕涼	大判錦絵一枚	1811~1843(文化8 ~天保末年)	(綿樹堂) 伊勢屋利兵衛版 萬(屋)孫(兵衛)版 ホリケイ
24	落合芳幾	東京両国川開之図	大判錦絵三枚続	不詳(明治)	武川(卯之助)
25	揚斎延一	両国花火之三曲	大判錦絵三枚続	1887~1907 (明治20~40年)	藤慶版
26	喜斎立祥(歌川広重Ⅱ)・豊原国周	東都両国 大花火	大判錦絵三枚続	1872 (明治5年)12月	松木栄吉版
27	井上探景	両国煙火図	大判錦絵三枚続	1877 (明治10年)4月	影画共進舎内三浦武明
28	紫斎重清	東京名所競 両国花火	大判錦絵一枚	1884 (明治17年)5月	—
29	揚州周延	両国川開の花火	大判錦絵三枚続	1887(明治20年)	人形町具足屋 (福田熊二郎)
30	豊原国周 井上探景	両国大花火夕涼之景	大判錦絵三枚続	1887 (明治20年)4月	福田熊二郎版(具足屋)
31	蕪州周春	金親樓 両国橋大花火之真図	大判錦絵三枚続	1887(明治20年)	児玉又七版(小田原屋)
32	揚斎延一	両国川開煙花の賑い	大判錦絵三枚続	1894 (明治27年)6月	版元辻岡文助(金松堂)

●関連収蔵資料

No.	名 称	形状・寸法	年 代	備 考
33	花火秘伝集(唯心流)	122mm×169mm	1837(天保8年)の写し	—
34	花火秘伝書	155mm×97mm	江戸時代	版本、上・下の2冊のうち上のみ。
35	隅田川兩岸一覽	225mm×176mm	江戸時代	北斎画
36	隅田川兩岸一覽	301mm×212mm	1917(大正6年)	北斎画(国書刊行会複製版、全3冊)
37	天工開物	227mm×182mm	1771(明和8年)	全9冊
38	和漢三才図会	249mm×178mm	江戸時代	「58. 火類」に花火の記述
39	北条五代記	225mm×183mm	1659(萬治2年)	全10冊、風月庄左衛門板行

●コラム1

もっと花火を知りたい人のために

資料展をご覧になって、花火のことをもっと知りたくなってしまった人のために参考文献をご紹介します。ただし、細谷、武藤氏以外のものは、手に入りにくくなっているかと思います。

＊

清水武夫『花火』1957年、一橋書房
山本祐徳『火災予防と黒玉研究』1962年、東京都

疋田 強『爆発』1965年、コロナ社
北川徹三『化学安全工学』1969年、日刊工業新聞社

奥村正二『火縄銃から黒船まで』1970年、岩波書店

清水武夫『花火の話』1976年、河出書房新社

小勝郷右『日本花火考』1979年、毎日新聞社

細谷政夫『花火の科学』1980年、東海大学出版会

日本煙火協会編『日本煙火協会参拾年史』1993年、あずさ書店

武藤輝彦『どーんと花火だ』1994年、三空出版

●コラム2

錦絵鑑賞のための用語解説

改印 寛政2年(1790)に執行された検閲制度。出版は町奉行の管理下におかれ、製版前に版下を提出し、許可印を画中に受けた。時代によって異なるので、時代判定の参考となる。

浮絵 遠近がはつきり浮き出し、奥行が深まって見えるための呼称。洋画の技法というより、中国版画の流入によるものとされ、奥村政信の創案だといわれる。

大錦 大奉書(約54cm×39cm)の半切りで、約27cm×39cmの大きさ。

草双子 通俗的な絵入りの読み物のことで、絵草子ともいう。表紙の色などで、赤本、黒本、黄表紙などという。

源氏絵 柳亭種彦『修紫田舎源氏』の流行で、幕末の絵師はみなこれを手がけた。明治の官女風宮廷絵にも影響を与えた。

錦絵 明和2年(1765)、鈴木春信により始められた多色摺の浮世絵版画。

版元 絵、本の出版社。

見立絵 古典、説話、歴史などを当世風に描いた版画。画題を見立、やつしなどとする場合と画面で分らせるものがある。

落款 書画に作者が自筆で署名し、もしくは雅号の印をおしたもの。鑑定や作家研究の重要な資料となる。

●借用展示資料一覧

No.	名 称	形状・寸法	年 代	所 蔵 者	備 考
40	厚木花火大会のポスター	51cm×72cm	1935(昭和10年)	飯田 孝	—
41	厚木鮎まつりのポスター	51cm×72cm	1948(昭和23年)	飯田 孝	第1回目のもの
42	花火打ち揚げの筒	高さ100cm φ15cm	明治～大正頃	細谷エンタープライズ	木筒
43	花火打ち揚げの筒	高さ125cm φ15.5cm	昭和初期	ファイアート神奈川	単打用(旧式)
44	花火打ち揚げの筒	高さ110cm φ15.5cm	現在	ファイアート神奈川	単打用(新式)
45	花火打ち揚げの筒、箱	62cm×13.5cm 高さ47cm	現在	ファイアート神奈川	連発用(スターマイン)
46	花火打ち揚げ道具	φ15.5cm	現在	ファイアート神奈川	早打用の焼金(4号玉用)
47	花火打ち揚げ模型	高さ65cm φ14cm	現在	ファイアート神奈川	説明用の透明筒
48	花火内部の構造模型	φ23.5cm	現在	ファイアート神奈川	7号玉
49	花火玉の模型	φ9cm	現在	ファイアート神奈川	3号玉
50	花火玉の模型	φ15cm	現在	ファイアート神奈川	5号玉
51	花火玉の模型	φ21cm	現在	ファイアート神奈川	7号玉
52	花火玉の模型	φ24cm	現在	ファイアート神奈川	8号玉
53	薬研	54.5cm×20.5cm	明治～大正頃	ファイアート神奈川	薬品配合用
54	木球	φ29.5cm	昭和	ファイアート神奈川	尺玉(10号玉用)
55	たたき棒	20.7cm φ2.8cm	現在	ファイアート神奈川	玉込に使用
56	煙火製造業許可証	27.5cm×19cm	1894(明治40年 7月19日)	ファイアート神奈川	和田忠次郎宛 神奈川県知事
57	煙火打ち揚げ記念写真	21cm×27cm	明治頃	柏木愛次郎	台湾にて
58	袋物煙火に詰められた紙人形	134cm×41cm	1906～1911 (明治39～44年)	柏木愛次郎	洋装男女二人 ブラジルで揚げたもの
59 ～67	花火製造過程の写真パネル				
68 ～80	花火の写真パネル				

さいごに

花火は、鮎とならんで郷土自慢の格好の材料とされています。ある人が、地元主催の花火大会を「日本三大花火」と称したところ「それでは他のふたつはどこなんだ」とからかわれたという話を聞いたことがあります。花火の優劣は、花火の大きさ、芸術性、打ち揚げ量、大会の規模……等々、その基準はいろいろと考えられ、何で決まるのか明確ではありません。それでも、「郷土の花火は一番」と思い込むことができるのは、「地元でみる」という絶対的な付加価値があるからこそでしょう。

火薬の扱いに免許が必要となるまでは、素人が農業の合間などに作って楽しむことが多くみられたといいます。厚木市域でも、そのように多くの人が花火を楽しんでいたものと伝えられています。今回展示します錦絵に描かれた花火は、「和火」といわれるもので現在のものとは材料、製造方法などが異なります。描かれている場所も両国周辺であり、秘伝

書類もまた厚木のもではありません。しかし、川開きの賑わい、夕涼みの風情などには現在の厚木と共通する点多々あるかと思います。これらの絵画資料に描かれた世界は、時として文字資料以上に雄弁に物を語り、描かれた人物、背景等の細部に大きな発見があることも珍しくはありません。このように絵画資料を「読む」という試みは、近年盛んに行われ、成果をあげています。

展示された錦絵、地元の花火屋さんの資料はともに、「厚木の花火は一番!」と思い込む材料にすることもできるかと思います。もちろん、こうした背景を知らなくとも花火を楽しむことは十分に可能です。しかし、その背景、原理を知り、見どころが分れば、もっと興味深く楽しめるのではないのでしょうか。

収蔵資料展に出かけてから楽しむ今年の花火は、より一層面白くなること請け合いです。

(收藏資料展企画担当 大野一郎)

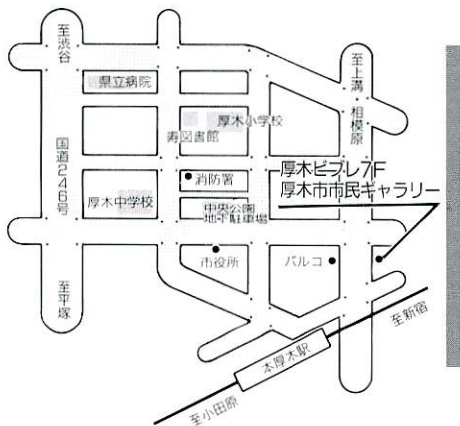
会場 厚木市 市民ギャラリー(厚木ビブレ7F)

期間 平成7年7月20日(木)～26日(水)

時間 午前10:00～午後6:30

協力 飯田 孝、榎 陽介、小澤 弘、柏木
愛次郎、小林 稔、難波東平、武藤輝彦、

和田吉二（ファイアート神奈川）、山崎祐子、江戸東京博物館、神奈川県立歴史博物館、須賀川市立博物館、日本煙火協会、細谷エンタープライズ、厚木市教育研究所（敬称略）



博物館收藏資料展 4

—夏の風物誌— 花火 fireworks

発行日 平成7年7月15日

編 集 厚木市教育委員会

社会教育課博物館準備係

〒243 神奈川県厚木市寿町3-15-26

TEL (0462) 23-9558

発行 厚木市教育委員会

印刷 神奈川印刷株式会社

